

平成30年度

男女共同参画に関する市民意識調査

報告書（抜粋）
考察

静岡市 市民局 男女参画・多文化共生課

調査の概要

1. 調査の目的

本市では、性別にかかわることなく、それぞれの個性と能力を発揮し、家庭、地域、職場などあらゆるところに共に参画し、責任を担いあう社会、『男女共同参画社会』の実現を目指しており、平成27年度（2015年）から平成34年度（2022年）を期間とする「第3次静岡市男女共同参画行動計画」の後期計画の見直しにあたり、計画改定の基礎資料とする。

2. 調査の方法

- (1) 調査対象 18歳以上の市民
- (2) 標本数 2,500人
- (3) 抽出方法 住民基本台帳から18歳以上の市民を無作為抽出
- (4) 調査方法 郵送調査・自記式アンケート
- (5) 調査期間 平成30年5月7日（月）～平成30年5月25日（金）

3. 回収率

配布数 有効回収数 有効回収率
2,500票 889票 35.6%

この冊子の読み方

1. 結果は百分率で表示し、小数点第2位を四捨五入しています。このため百分率の合計が100%にならないことがあります。
2. 数値やグラフ中の「N」は回答者総数を示し、回答比率はこれを100%として算出しています。
3. 複数回数をしてよい設問では、百分率の合計が100%を超える場合があります。

プロフィール

静岡県立大学 国際関係学部 教授 犬塚協太
静岡県立大学男女共同参画推進センター長
国際関係学部教授

専門の家族社会学、ジェンダーの社会学に関する研究教育のほか、地域における男女共同参画推進のためのさまざまな社会活動も行っている。

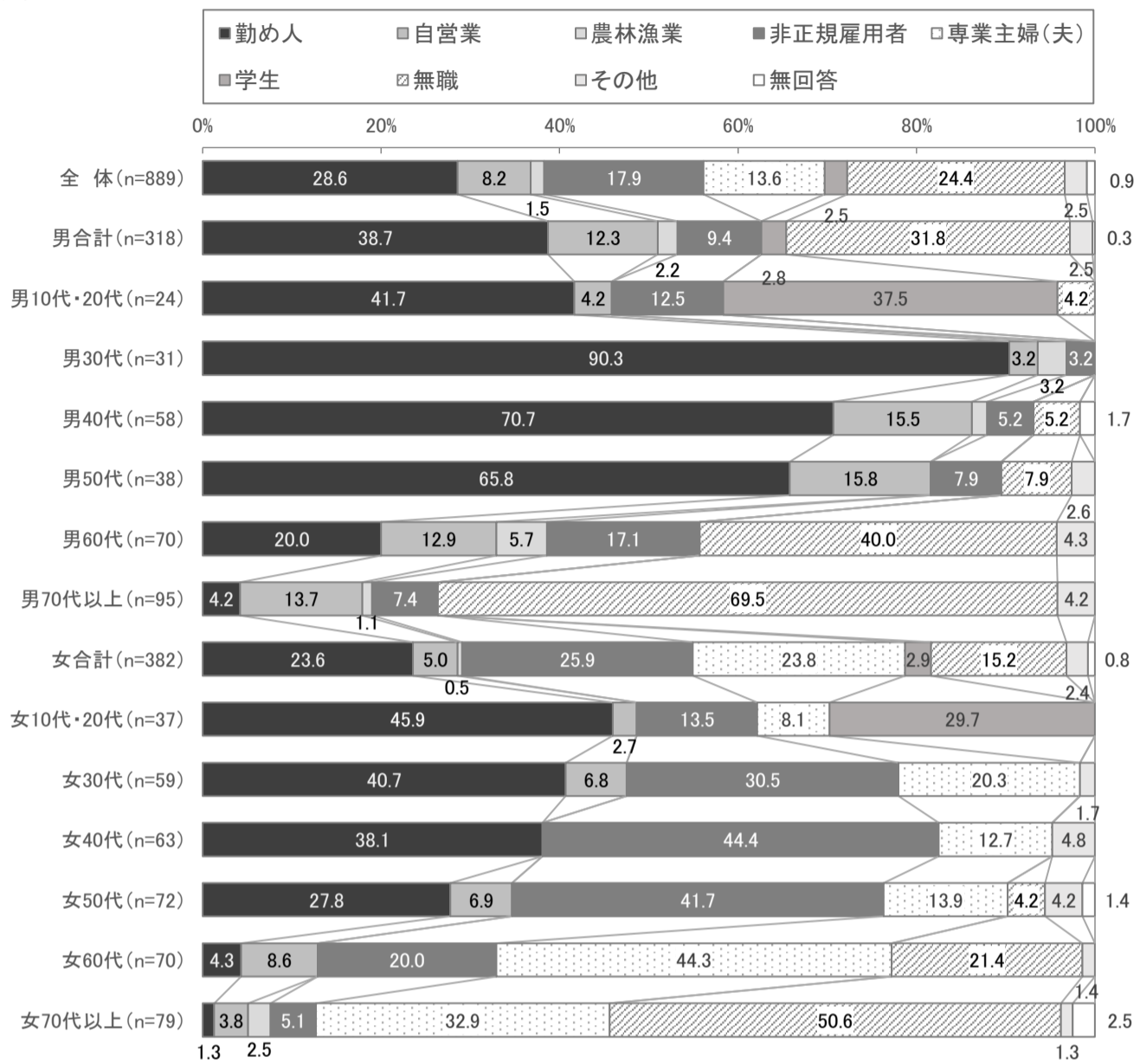


市民意識調査（性・年代別）グラフ一覧

設 問	内 容	ページ
フェイス（４）	職業	３
フェイス（９）	あなたご自身の平成２９年中の年間収入（税込）	４
フェイス（１０）	あなたの介護の状況	５
問１	男女平等意識（１）家庭生活で	６
問１	男女平等意識（２）職場で	７
問１	男女平等意識（３）学校教育の場で	８
問１	男女平等意識（４）地域活動の場で（自治会・PTAなど）	９
問１	男女平等意識（５）政治の場で	１０
問１	男女平等意識（６）法律や制度の場で	１１
問１	男女平等意識（７）社会通念・慣習・しきたりなどで	１２
問１	男女平等意識（８）社会全体として	１３
問２	「ワーク・ライフ・バランス（仕事と家庭の調和）」認知度	１４
問３－１	「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」の優先度（希望優先度）	１５
問３－２	現実・現状に近いもの（現実・現状）	１６
問５	男性が「育児休業」や「介護休業」を取得することについての意識	１７
問７	女性が職業をもつことについての意識	１８
問８	社会における女性の活躍状況について、国際機関が各国を順位づけしていることの認知度	１９
問１２	LGBTなど性的少数者の認知度	２０
問１７	配偶者間での暴力意識（１）足でける	２１
問１７	配偶者間での暴力意識（２）平手で打つ	２２
問１７	配偶者間での暴力意識（３）なぐるふりをして、おどす	２３
問１７	配偶者間での暴力意識（４）大声でどなる	２４
問１７	配偶者間での暴力意識（５）他の異性との会話を許さない	２５
問１７	配偶者間での暴力意識（６）何を言っても長時間無視し続ける	２６
問１７	配偶者間での暴力意識（７） 交遊関係や行き先、電話・メールなどを細かく監視する	２７
問１７	配偶者間での暴力意識（８）家計に必要な生活費を渡さない	２８
問１７	配偶者間での暴力意識（９）家族や友人との関わりを持たせない	２９
問１７	配偶者間での暴力意識（１０） いやがっているのに、性的な行為を強要する	３０
問２０	若年層の女性が性的な被害を受ける問題の認知度	３１
	考察まとめ	３２

あなた自身のことについてお答えください。

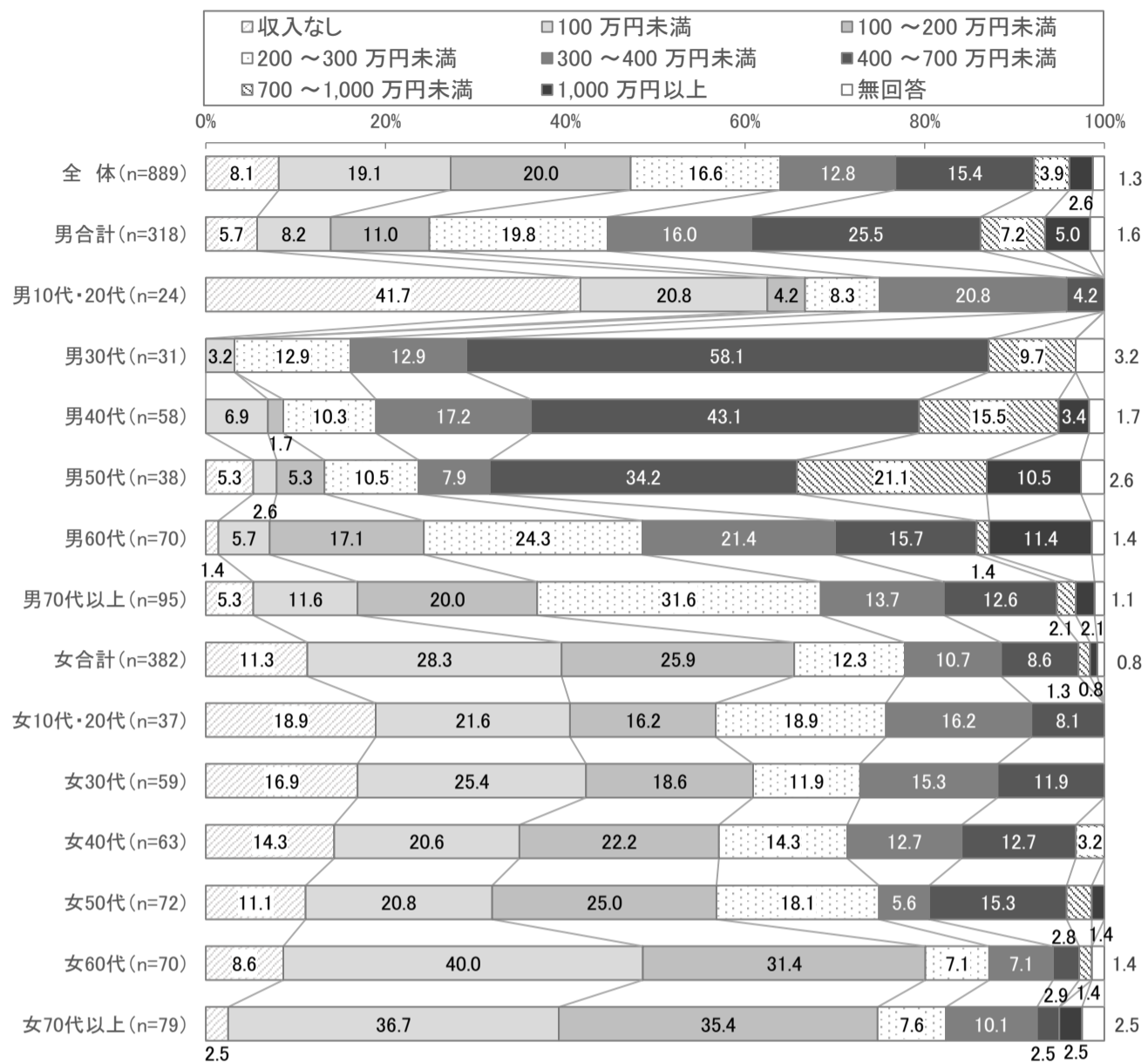
(4)職業



<考察>

全国の調査でもみられるような、男性のほうが圧倒的に勤め人が多いという、一般的な傾向がみられた。
 また、女性に特徴がある。年代が上がるにつれて、正規雇用が減っていく一方、反比例して非正規雇用の割合が増えている。性・年代別でみると、その違いが顕著に現れている。男性30代の9割が勤め人であるのに対し、女性30代ではその約半数に留まる。この結果を踏まえて、施策を進める必要がある。

(9)あなたご自身の平成29年中の年間収入(税込)



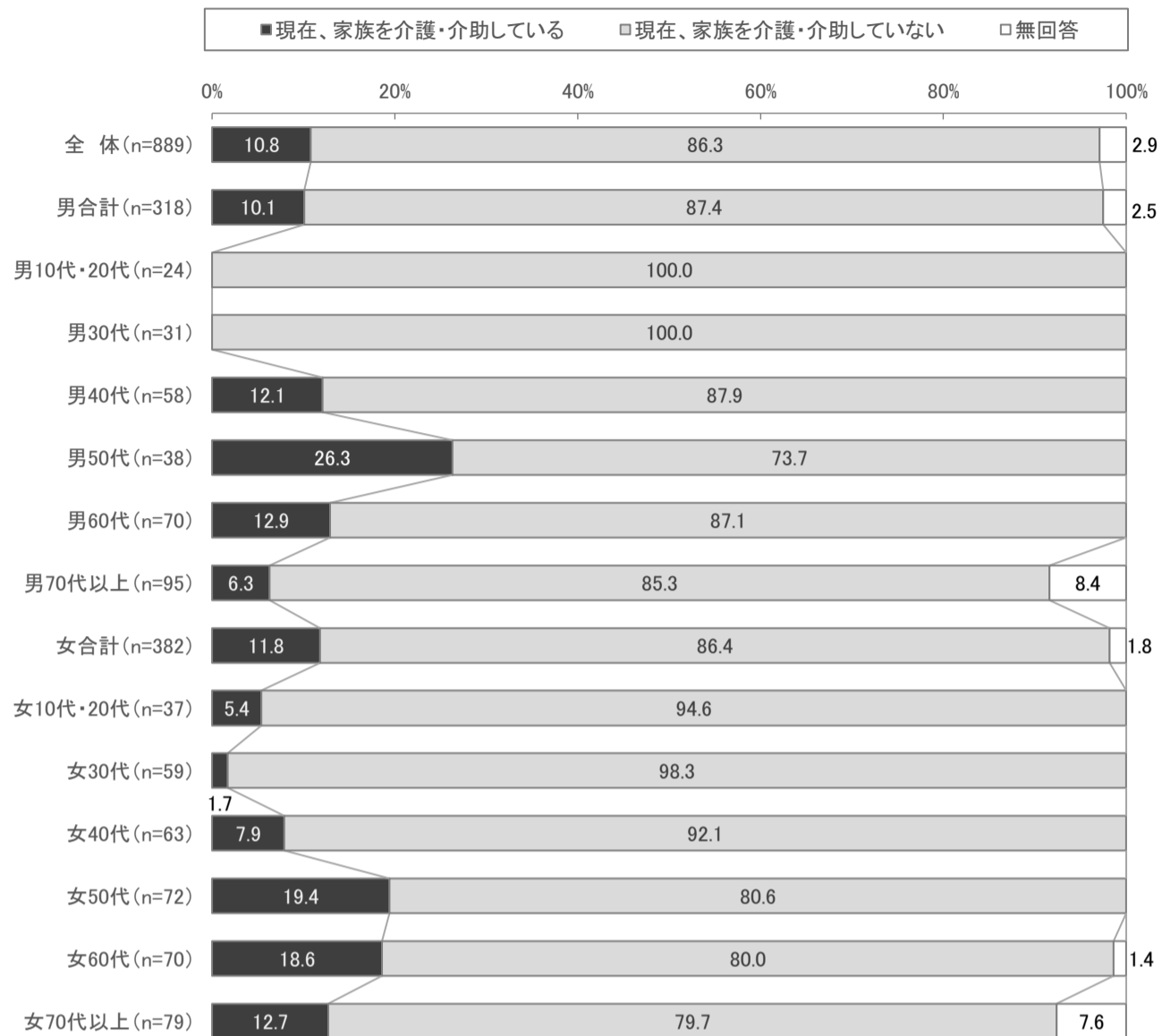
<考察>

男性では比較的年齢が上がるにつれて高収入の人が増えてと言えるが、一方で全体的に低収入層が増えてきている。今まで、300万円未満の人は若年層に多かったが、高度成長期の男性40~50代に比べ、男性40~50代でも増えてきている。

また、特に女性で低収入者が増えている。仮に現役世代を10~50代とすると、200万円未満の低収入者が過半数を占めている。60代以上の高齢者層になると、8割以上が200万円未満の低収入者が多い。

この状況から、女性全体の貧困がうかがえる。高齢女性の貧困問題については、女性が結婚・出産を期に、職業から離れてしまうことが主な原因の一つと考えられる。このことについて、「女性も働き続けることが大切である」ということを若年層に啓発すべきである。

(10)あなたの介護の状況

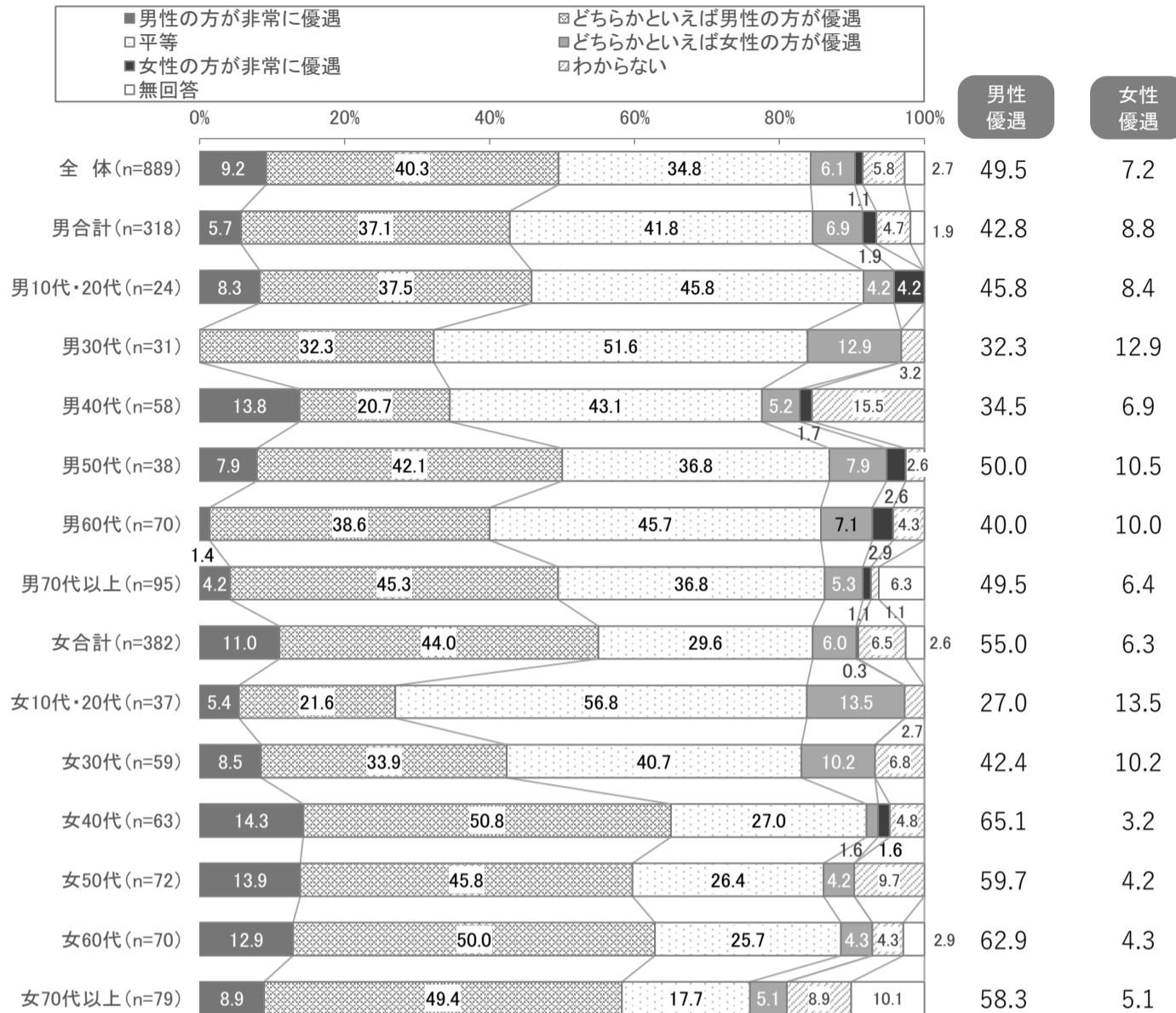


<考察>

特徴として、男性50代が突出して高いことがわかる。介護に深く関わっている人が約4人に1人という状況である。今後、男性にとって、ワーク・ライフ・バランスの問題において、子育てを離れた後でも少子化の影響から避けては通れない、自分自身に深く関わってくる問題となる。50、60代の女性は、すでにケア役割を担っているが、その女性の割合よりも男性50代の介護割合は高くなっている。この状況は、男性も自分自身の問題として避けて通れなくなっている現実が目前に来ているということを理解してもらいたい。

また、男性10～30代が0%であるのに対し、男性40代から急に増加している。若い男性もその状況を早めに認識し、対応できるようにすべきである。

問1 男女平等意識(1)家庭生活で



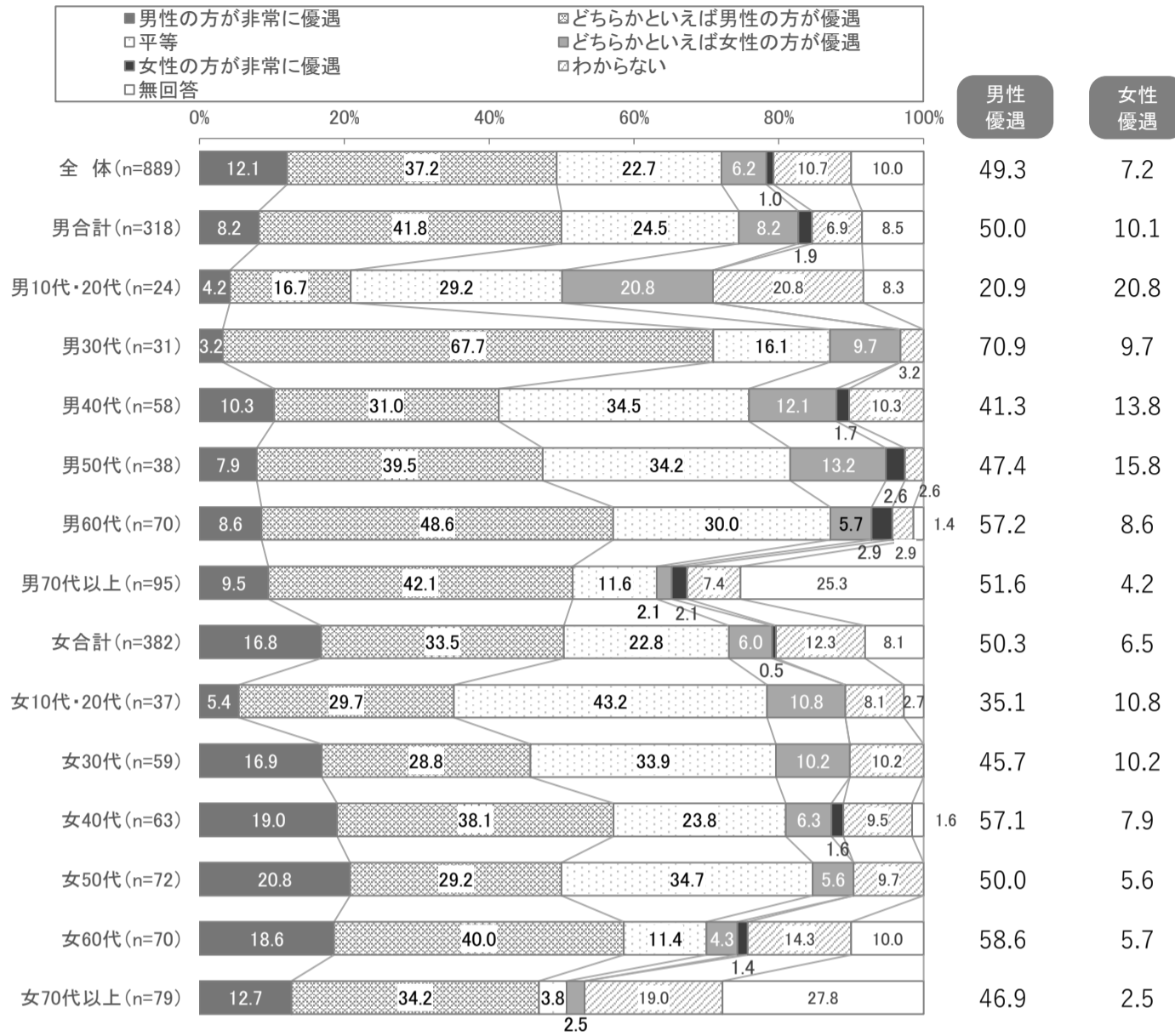
<考察>

10・20代では女性の27.0%が「男性優遇」、56.8%が「平等」と答えているにも関わらず、男性は「男性優遇」と答えている割合が45.8%と高くなっている。この結果から推察できることが2点ある。

1点目は、家庭生活は「教育の場で」平等と考える延長にあり、自分自身を主体に考えているため、親のことを男女間で平等であるかという批判的視点で見えていない。

2点目は、若年層にとって、家庭生活における夫婦のあり方がどういうものか当事者としてわからないため想像できず、特に女性が家庭生活を美化している可能性がある。そのため、女性が家庭での役割分担として、家事や育児等を多く担っている現状を把握していない。結婚・出産を経験するまたは経験した30歳以上のとの急激な差からも、その状況が推察できる。ここから、若年層の人たちも家庭生活が本当に平等になっているか、今一度考えてもらいたい。

問1 男女平等意識(2)職場で



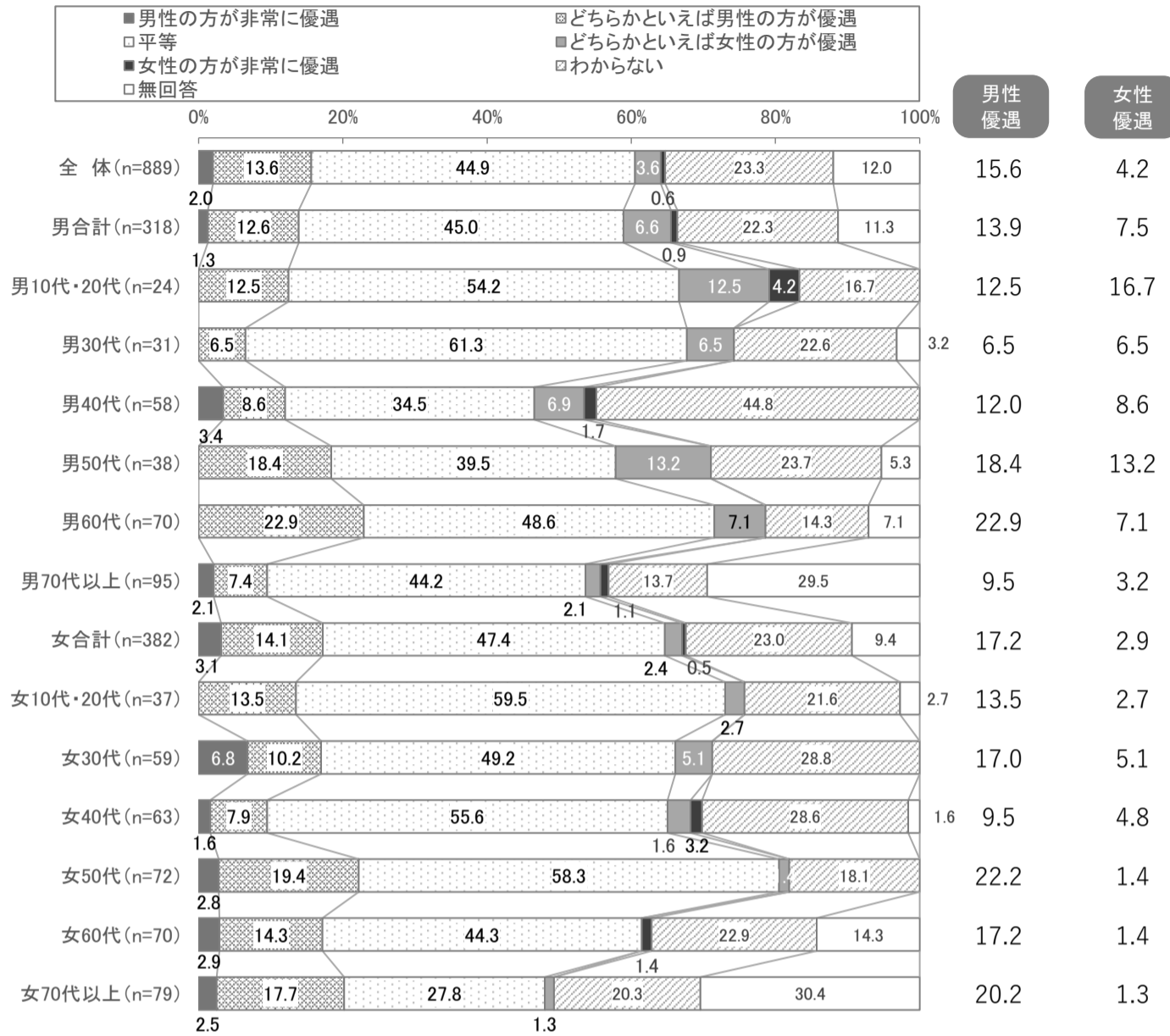
<考察>

男性の40代以上と30代では、意識が変わってきている。昔からの労働慣行を引き継いでいる職場ではまだ男性社会といえるものの、40代以上の男性にはその認識はなく、30代男性では不平等さに気づく人が増えてきている。

一方、女性では、10、20代の「職場」に対する意識について、同年代の男性よりも「平等」と捉えている意識が高い。これはまだ働いた経験に乏しい若年層の特徴と考えられる。

いまだ「男性優遇」と多く感じる社会において、職場についても、将来を考えた時に「仕事と家庭が両立できるのか」、「どうしたら仕事と家庭のバランスがとれるのか」を考えることが大切である。そのためには早いうちからのキャリア教育が有効である。

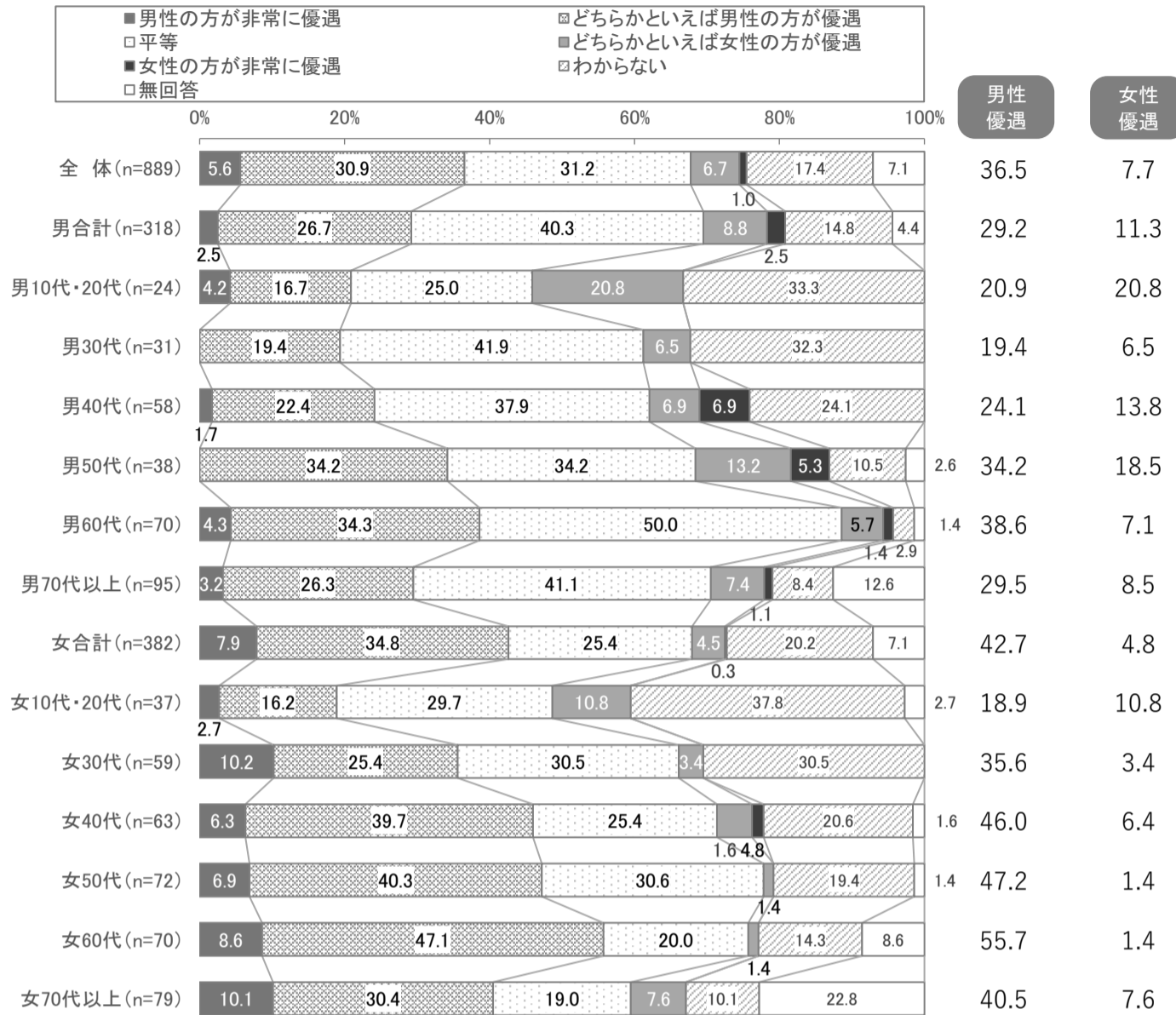
問1 男女平等意識(3)学校教育の場で



<考察>

今までとの傾向に変化は見られないが、強いて言えば30代において、男性の6割以上が「平等」と答える中、女性は「平等」と考える人の割合が10ポイント以上も少ない点が目を引く。現在の経験に基づく意識が過去の学校時代を批判的に見る視点を作りだしているのかもしれない。

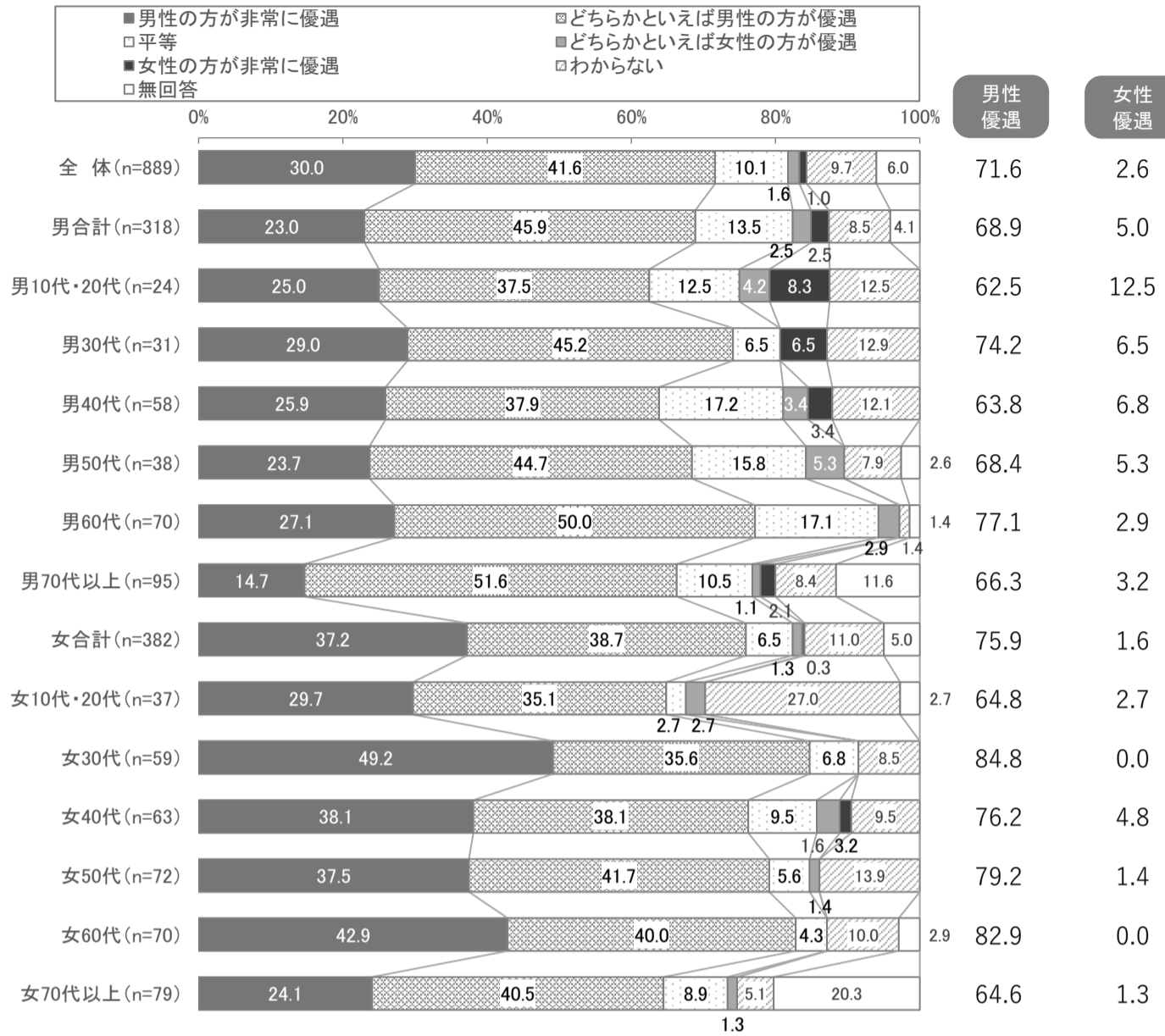
問1 男女平等意識(4) 地域活動の場で(自治会・PTAなど)



<考察>

男女ともに10～30代で「わからない」が多いことが特徴である。この原因として、地域活動者の高齢化が考えられる。10～20代男性で「女性のほうが優遇されている」と考えているのは、PTAは母親（女性）がやっているイメージが強いのかもしれないが、その実態を分かっていないのは同じであろう。

問1 男女平等意識(5)政治の場で

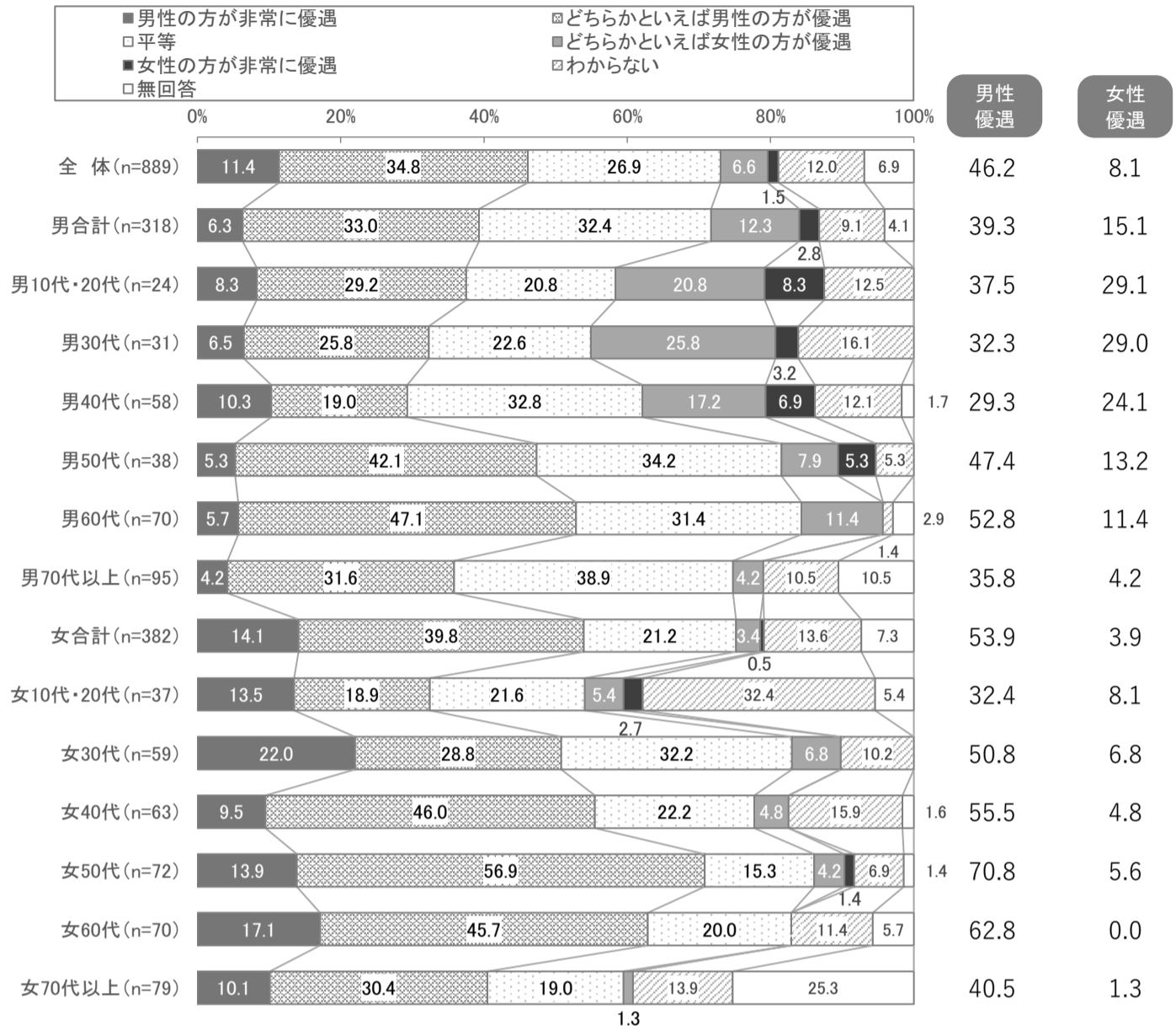


<考察>

男性でも「男性のほうが非常に優遇されている」と回答する人もいるが、女性のほうが「男性のほうが非常に優遇されている」と回答する人が多い。

また、「女性のほうが優遇」と答える割合が女性よりも男性のほうが多い。この結果から、男女間での認識のずれていることが分かる。この男女間での認識のズレが影響し、政治の場での男女格差につながっていくのかもしれない。

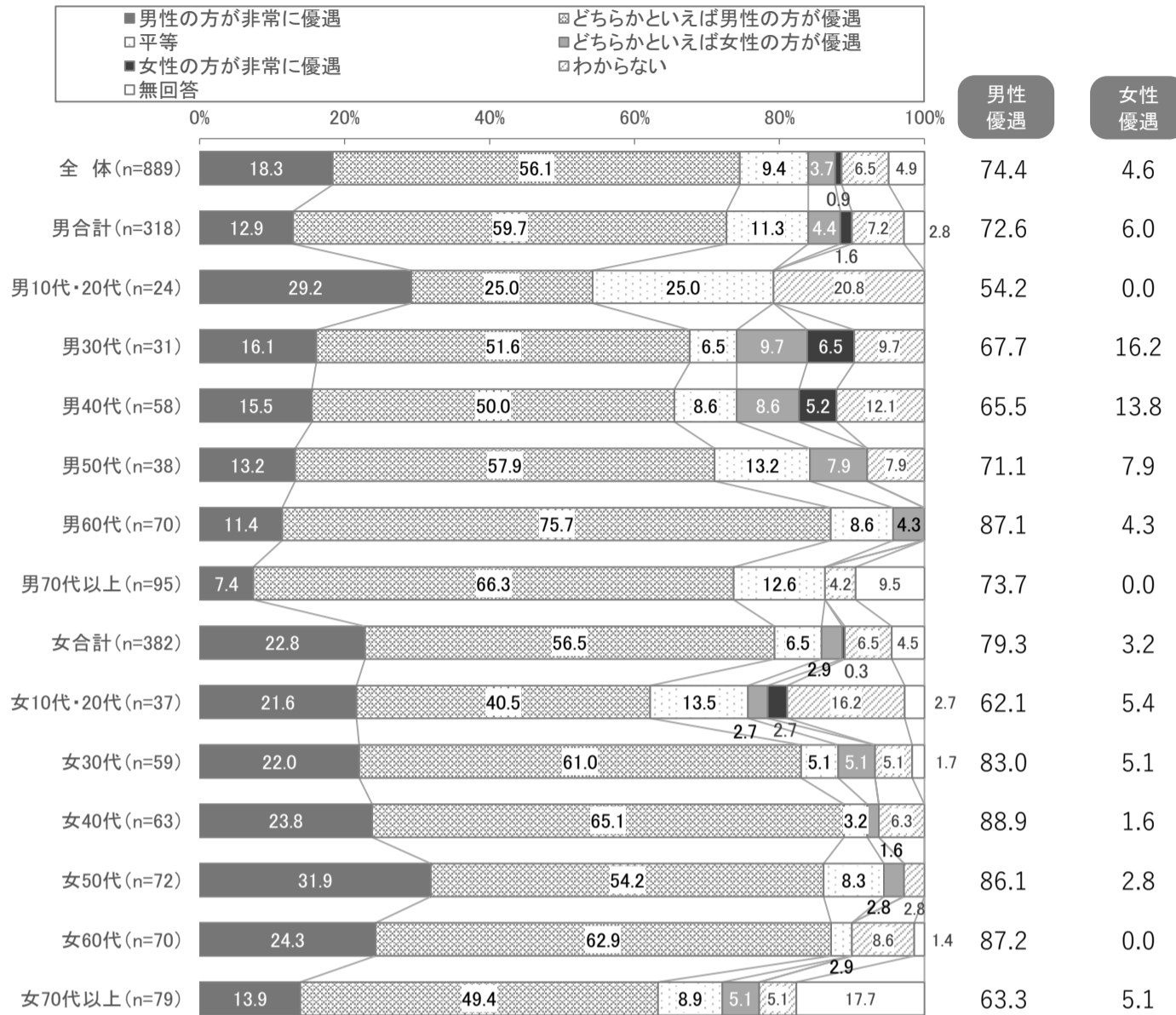
問1 男女平等意識(6) 法律や制度の上で



<考察>

「5 政治の場で」と同様、女性の方が「男性のほうが非常に優遇されている」と回答する人が多い。

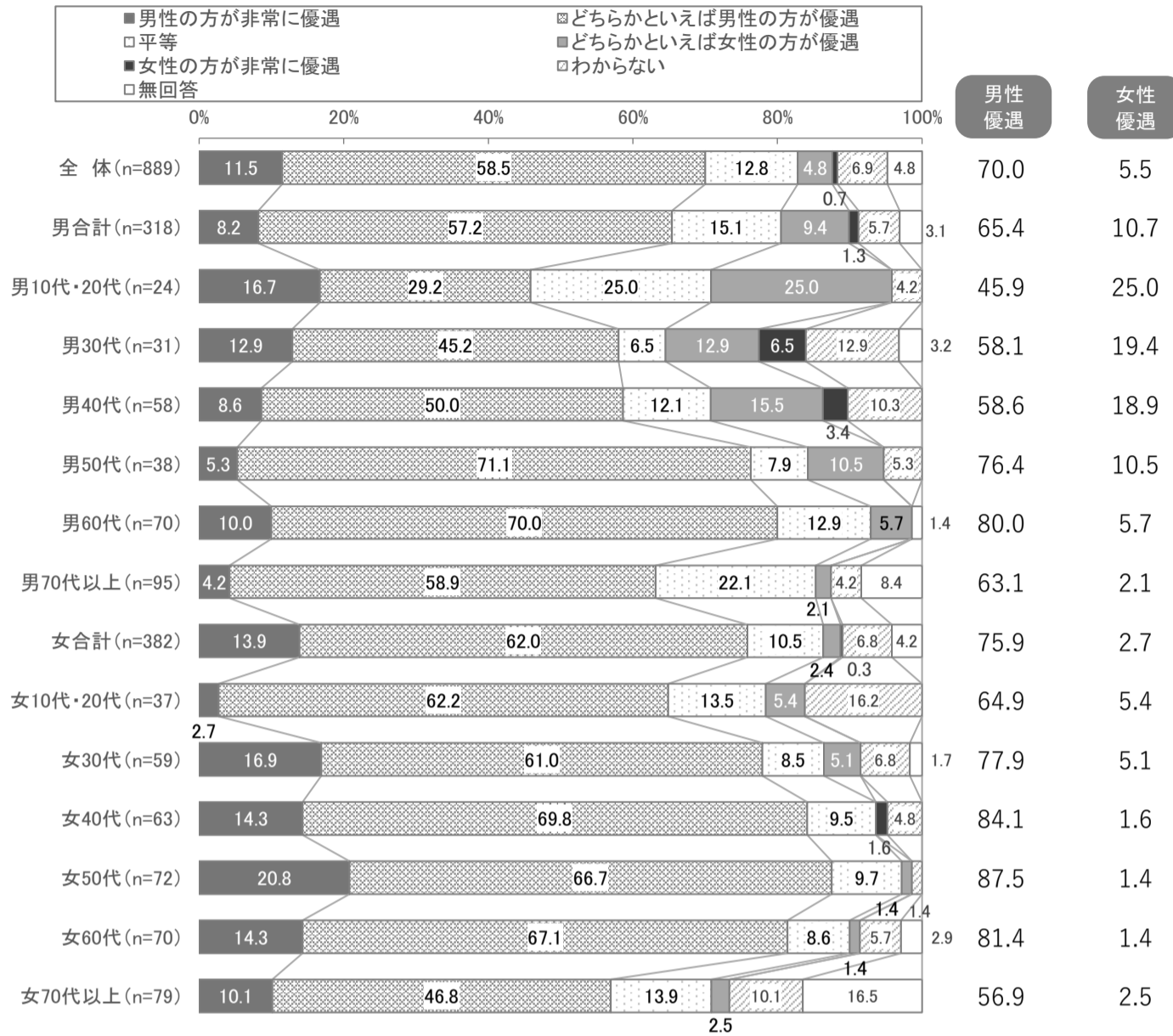
問1 男女平等意識(7)社会通念・慣習・しきたりなどで



<考察>

特定の分野、領域の話の部分的な問題ではなく、かたちにならない基底層（無意識の部分）に「男性優遇」の実態があることを男性も認識していることがわかる。

問1 男女平等意識(8)社会全体として



<考察>

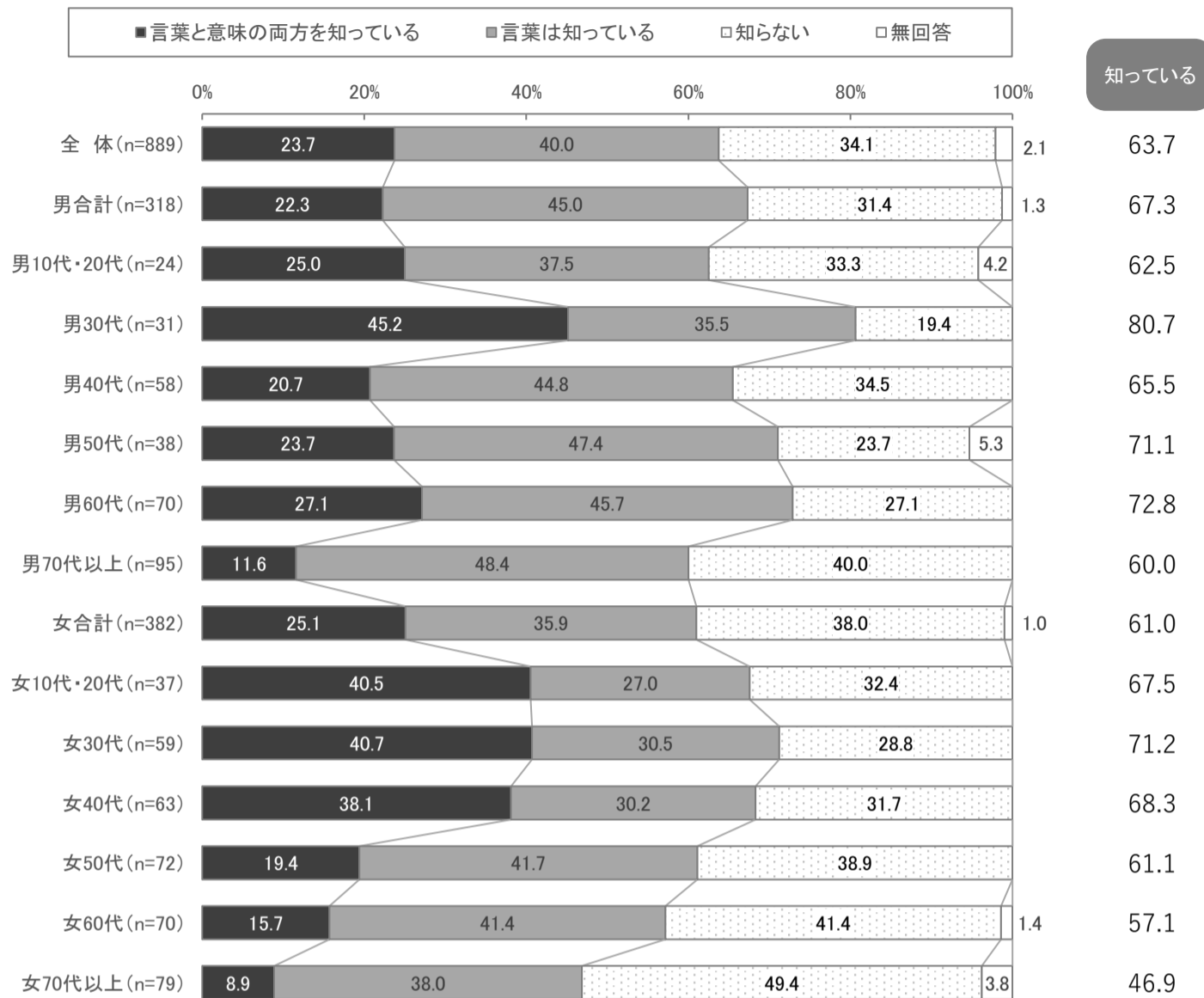
様々な場面の状況を勘案して「社会全体として」の結果を捉えると、圧倒的に「男性優遇」が多い結果となった。そして、男性よりも女性の方が「男性優遇」であるという認識が強い。

問1をとおして、男女平等意識について、考えなければならない課題というのが2点ある。

1点目は、「若年層への啓発」である。経験をしたことがないと、偏った見方をしてしまう。啓発により、若いときから、将来の自分がつくる「家庭」や「仕事」を考える機会を持つことで理想と現実の乖離を埋める必要がある。

2点目は、「高齢男性の理解」である。実際に家庭等を経験しているケースが多いため、理想と現実の違いではなく、男女で性別間における「平等」の認識にズレが起きている。そして、こういった現状があることを、女性側の認識もあわせて現役世代の男性に伝え、早くから理解してもらう必要がある。

問2 「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」認知度

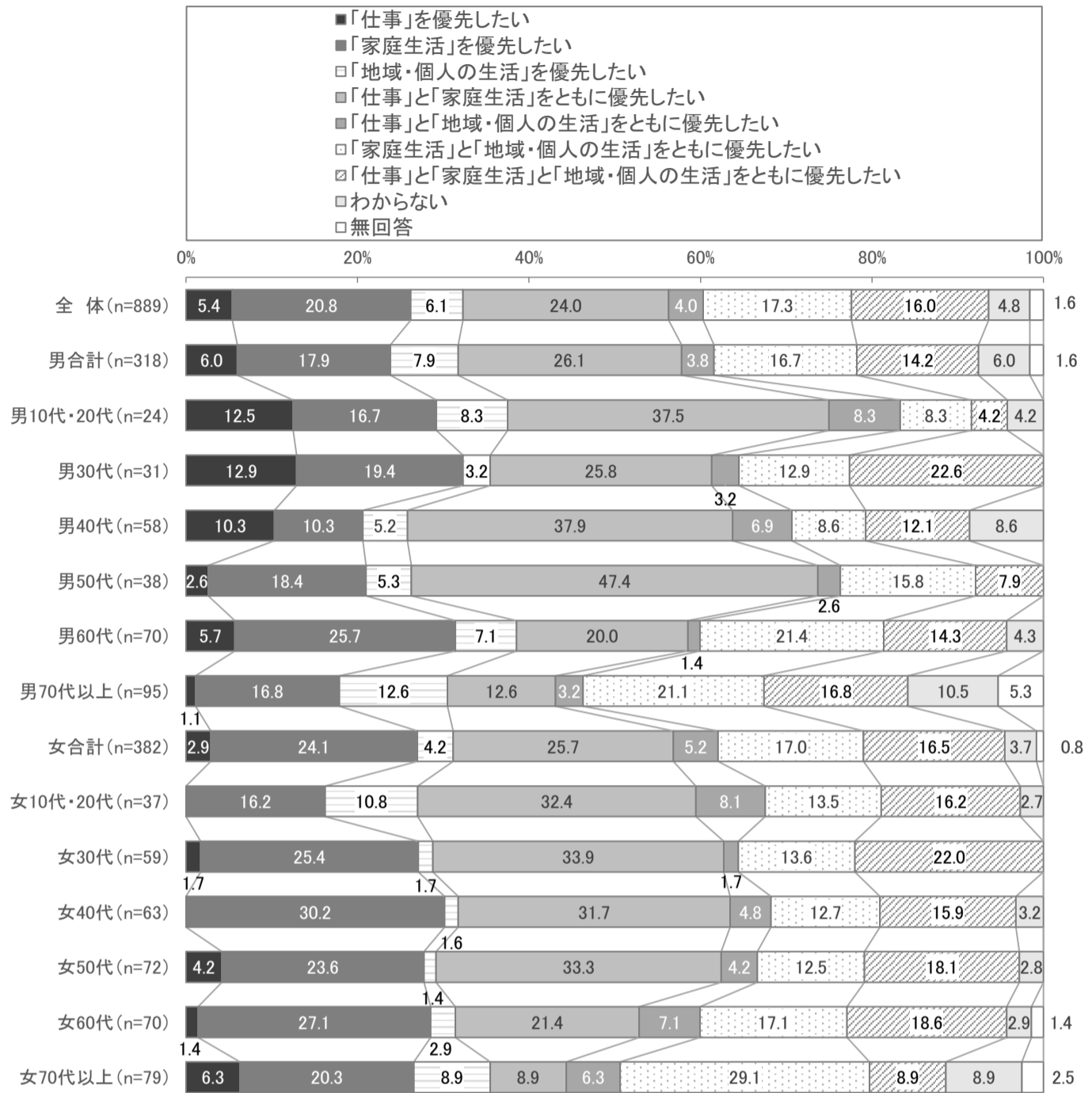


<考察>

「言葉と意味の両方を知っている」割合が、男性の中でも30代男性が突出して高い。この結果から推測できるのは、結婚や子どもをもつことが身近な問題になっており、30代男性では自分の問題として捉えている人が増えているということである。団塊世代ジュニアが多く、親が性別役割分担意識が強く残る家庭で育った40代とは、考え方が変わってきていることがわかる。

一方、実際の家庭生活等の関わりが大きい女性では、現役世代（10～50代）において、「言葉と意味の両方を知っている」割合が高い。

問3-1 「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」の優先度

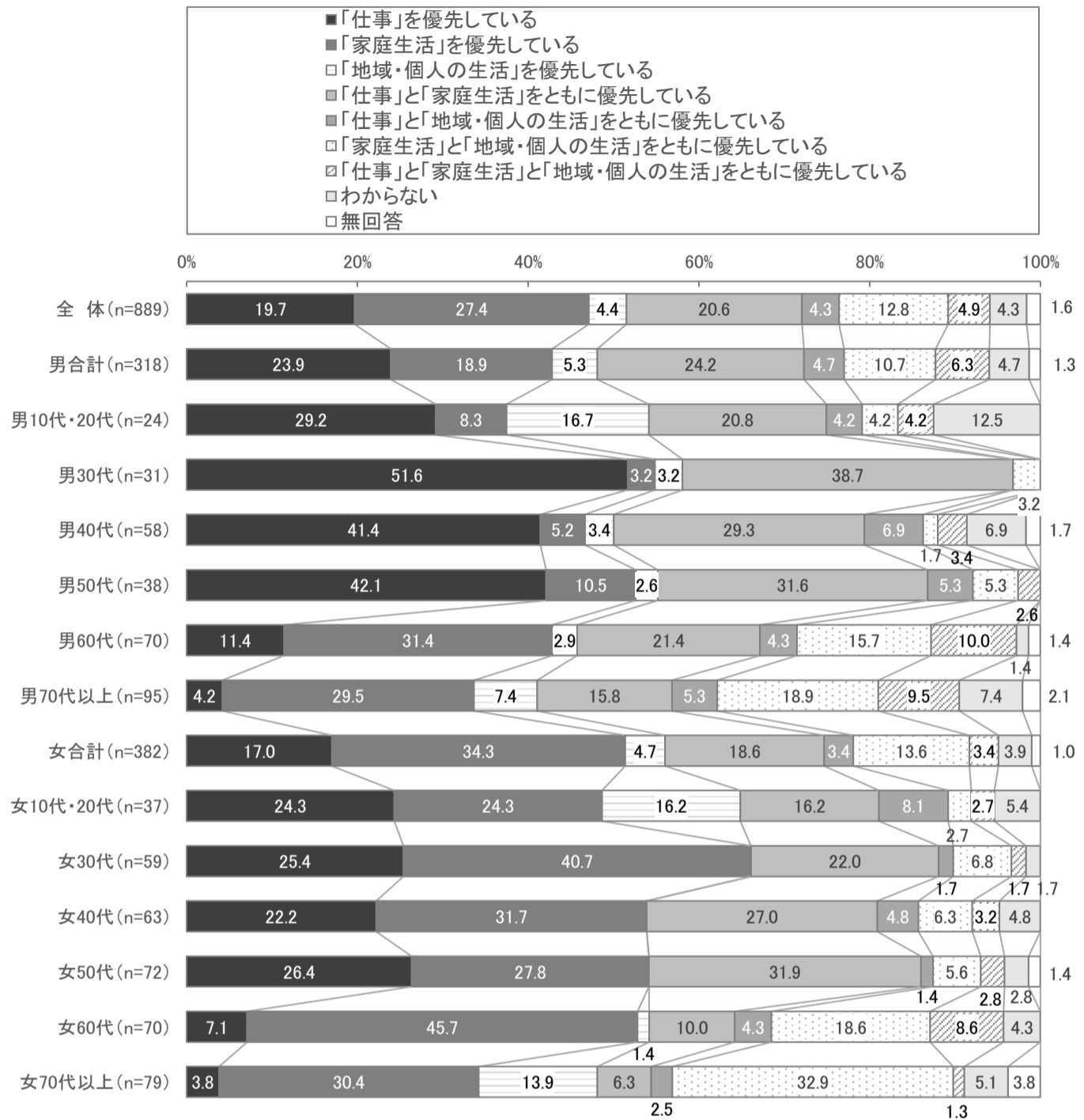


<考察>

以前は男性中心の労働慣行であったため、男性で「仕事優先」と回答する人が多かったのに対し、今回の調査では男性で「仕事優先」とする人が減っている。性・年代別で見ると、10～40代男性は変わらないが、男性50代で「仕事優先」が少なく、「家庭生活」または「仕事と家庭生活」をともに優先したいが高くなっている。これは介護状況の項目から見ても、介護世代に入ってきている50代において、「仕事優先」にできない問題が起きていることが推察できる。

年齢問わず、ワーク・ライフ・バランスについて意識するようになり、意識が変化してきている。その中でも、今後中高年層に対しては、この世代にとって切実な問題となる「介護」からアプローチすると、ワーク・ライフ・バランスを推進していく上では有効になるのではないだろうか。

問3-2 現実・現状に最も近いもの



<考察>

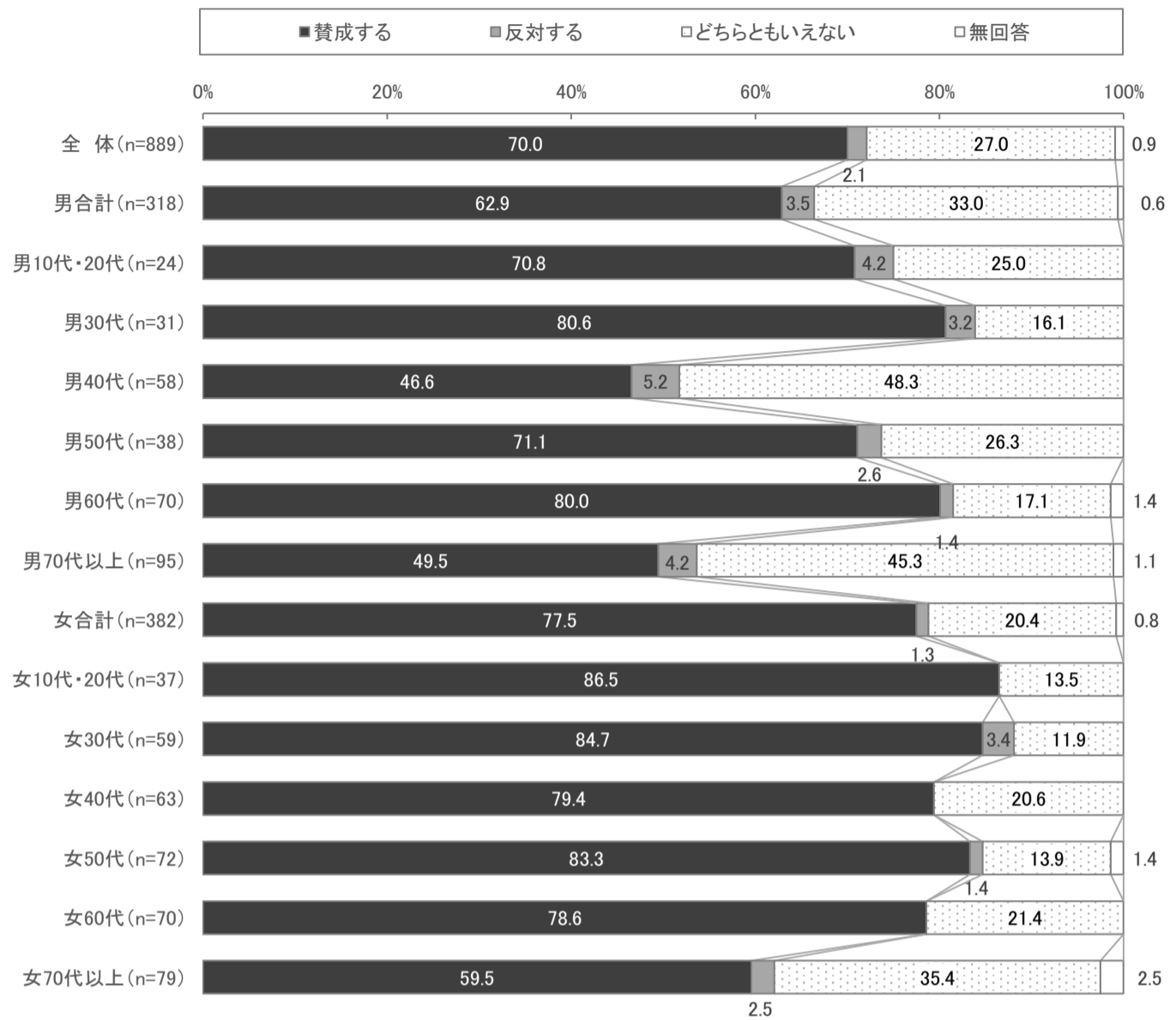
希望優先度と違って、「仕事優先」が多い結果である。これには男女差があり、特に男性のほうが「仕事優先」となる結果になっている。この結果からもまだまだジェンダーの問題で「男は仕事」ということに悩まされている男性が多いことも見えてきた。

一方、仕事と家庭のワーク・ライフ・バランスを実践している男性も増えている。しかしながら、希望優先度の結果と比較すると、「家庭生活」を優先させたいのにも関わらず、「仕事」を優先しなければならない理想と現実でのギャップが生じてきているのも事実である。この問題が大きくなれば、男性にとってメンタルで持たなくなってしまうため、考えていかなければならない問題と言えよう。

また、女性では、現役世代で同じことが言えるが、特に30代は子育て世代であるため、「家庭優先」にしたい希望がある。しかしながら、「仕事優先」にしなければならない現実があるため、男性と同様、ギャップが大きくなるとメンタルで持たなくなってくる。

この背景に、女性は仕事だけでなく、家事も従来と同じくらいやらなければならないという「新性別役割分業」がある。キャリアのためには仕事を頑張ることは悪いことばかりではない。だが、仕事か家庭の二重の重みで女性がつぶれてしまわないよう、女性の両立についてこれをどう社会的に支えていくか真剣に検討すべきである。

問5 男性が「育児休業」や「介護休業」を取得することについての意識

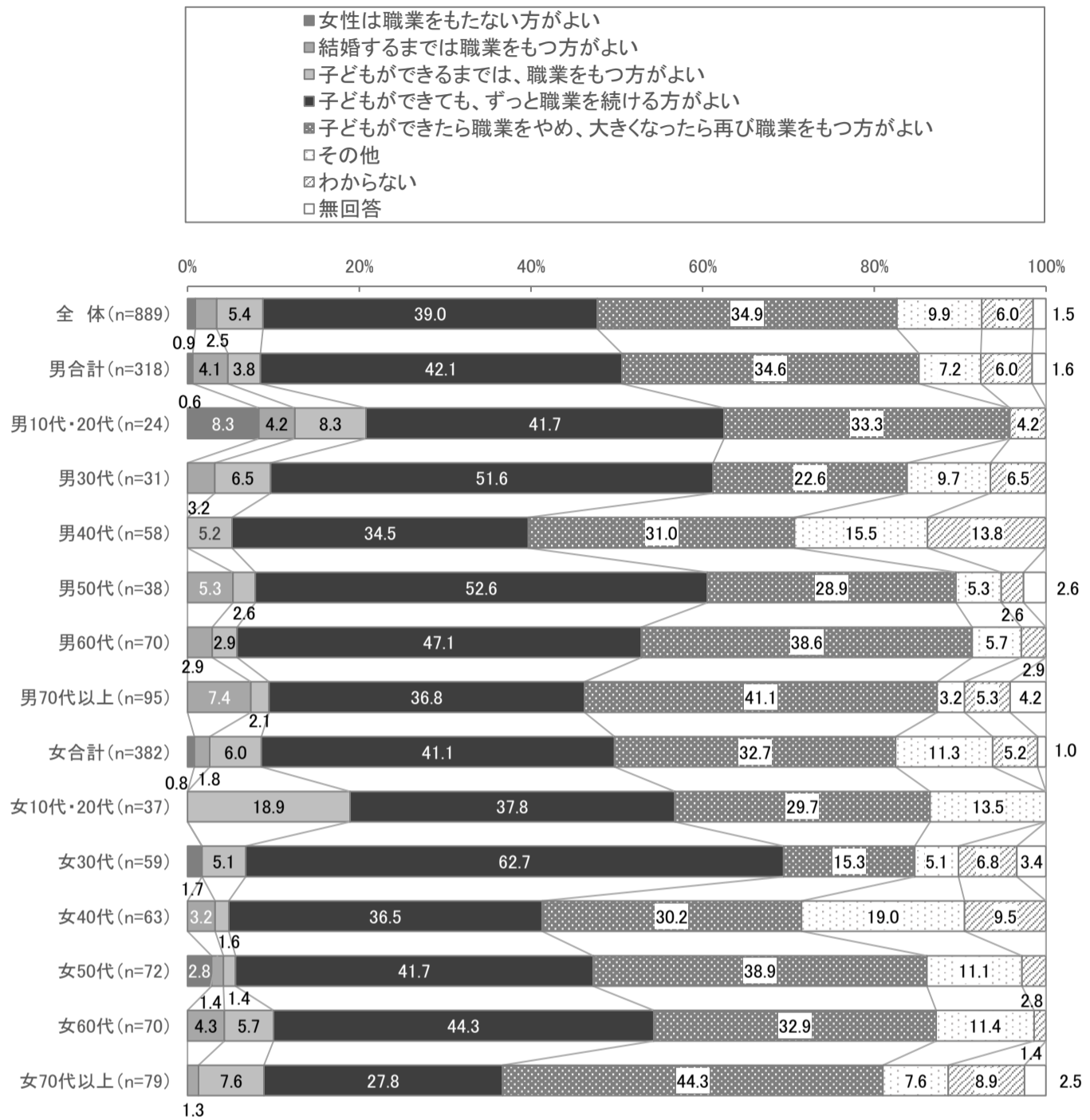


<考察>

昔（男性中心の労働慣行で働いてきた時代の回答）に比べれば変わってきていることが分かる。女性の方に賛成する意見が多いことから、女性の切実な思いが伝わってくる。

一方、どの設問をとおしても言えることだが、男性40代に特徴がある。この40代というのが境界になっている可能性がある。40代では、M字カーブの家庭が多く、「男は仕事、女は家庭」のイメージが強い可能性がある。一方、50代以上については、自分の子どもが子育て世代となってくるため、育児について考える機会が増えているのかもしれない。

問7 女性が職業をもつことについての意識

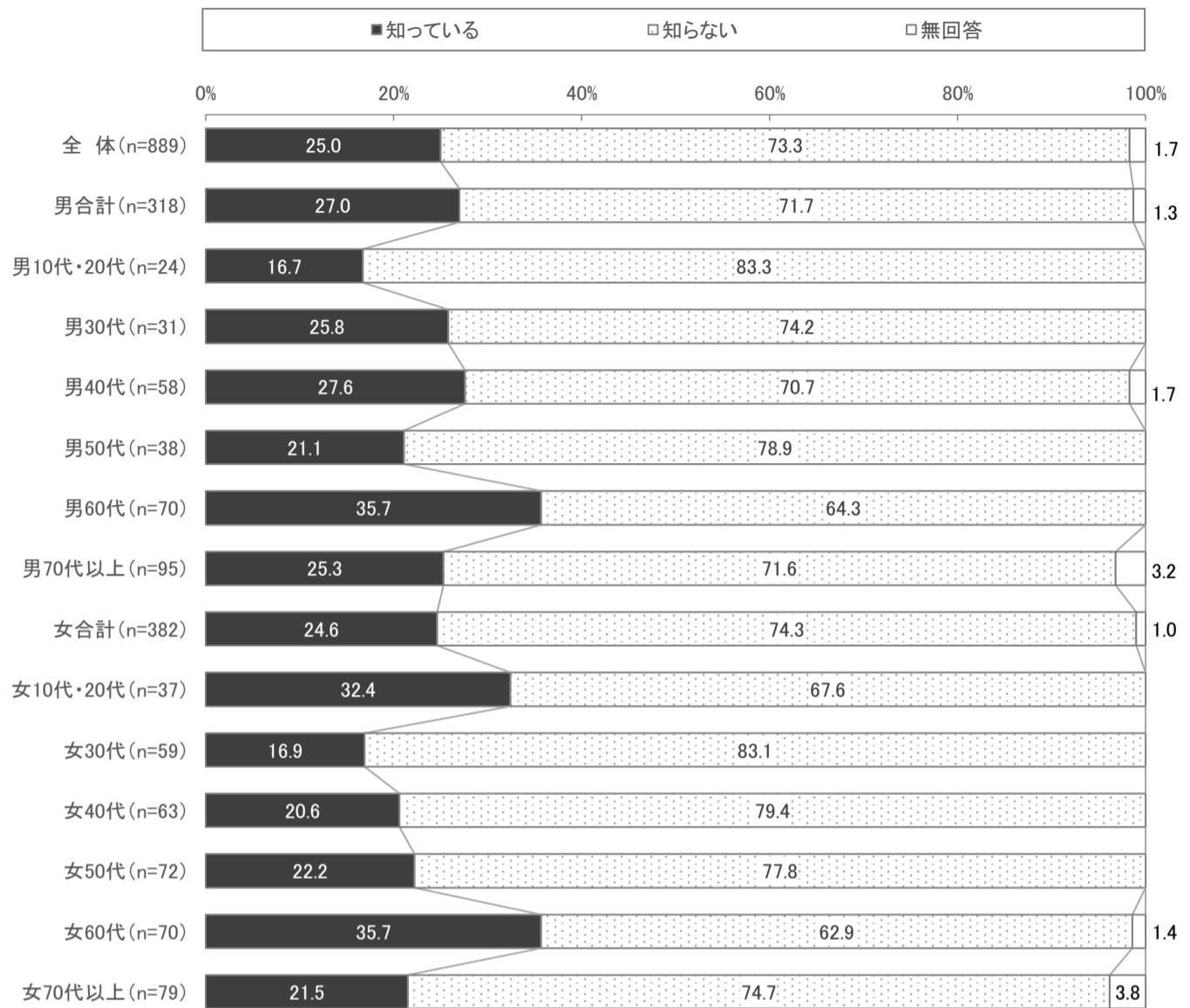


<考察>

30代にとって、共働きでないことは収入に直結する問題となるため、女性が働き続けることを良いとする数値も多くなっている。

また、問5と同じ傾向がみられ、男性40代にM字カーブの原因ともなる性別役割意識が影響していると考えられる。男女ともに40代で「わからない」の回答が多いこともその特徴を表している。30代のように意識変革がみられつつも、いまだ過去の性別役割分担意識を引きずっていると言えるだろう。

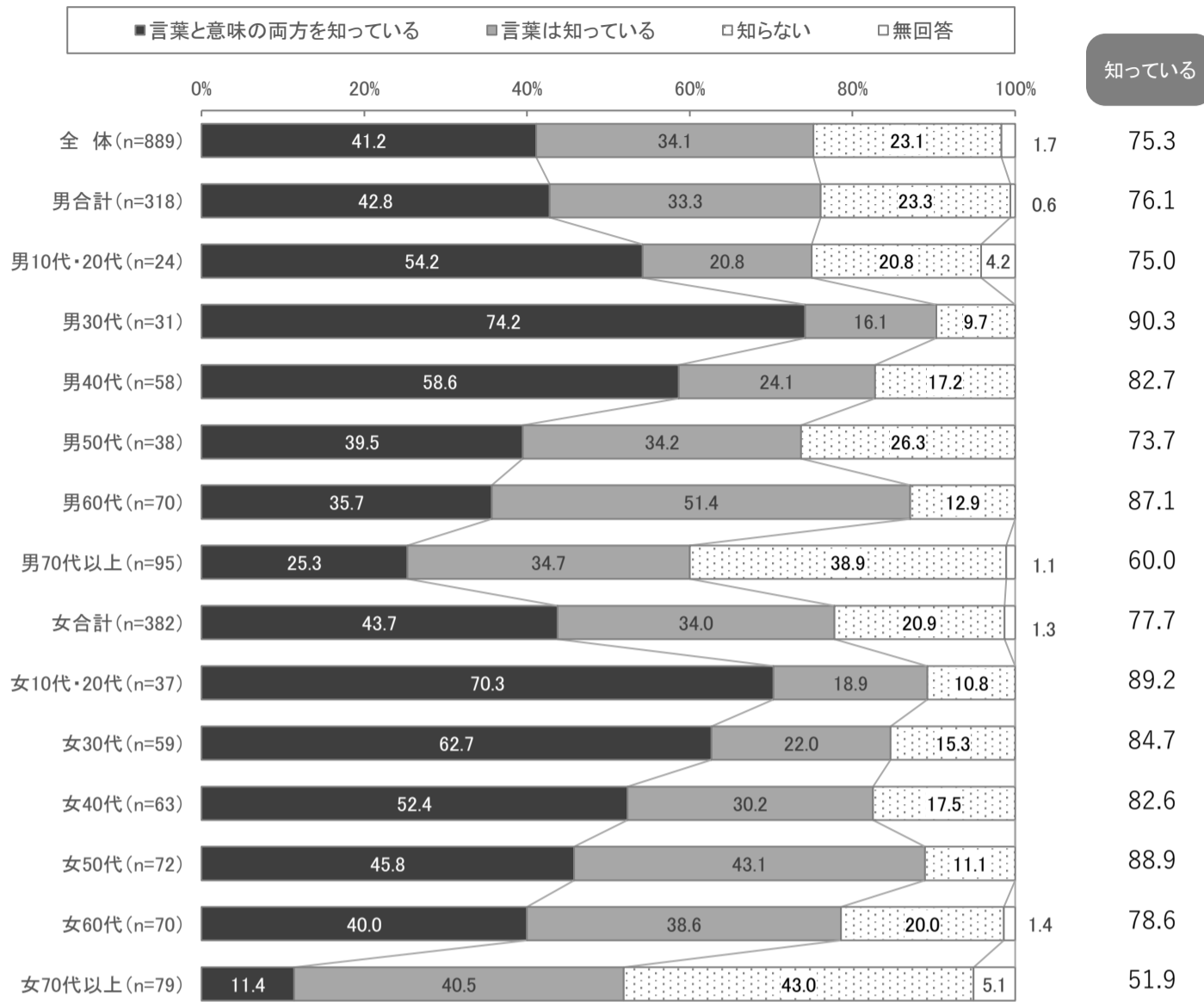
問8 社会における女性の活躍状況について、国際機関が各国を順位づけしていることの認知度



<考察>

相対的に、現役世代となる30～50代の女性の知識の乏しさが気になる。家事や育児、介護等、さらに仕事となると、その忙しさからあまり自己の問題意識として捉えていない可能性が高い。その結果、その結果自分の利害に直結する情報収集ができていないといえる。SNSが発達した現在において、情報収集方法は多岐にわたる。行政としてもこの人たちにも届く情報発信が重要となる。

問12 LGBTなど性的少数者の認知度

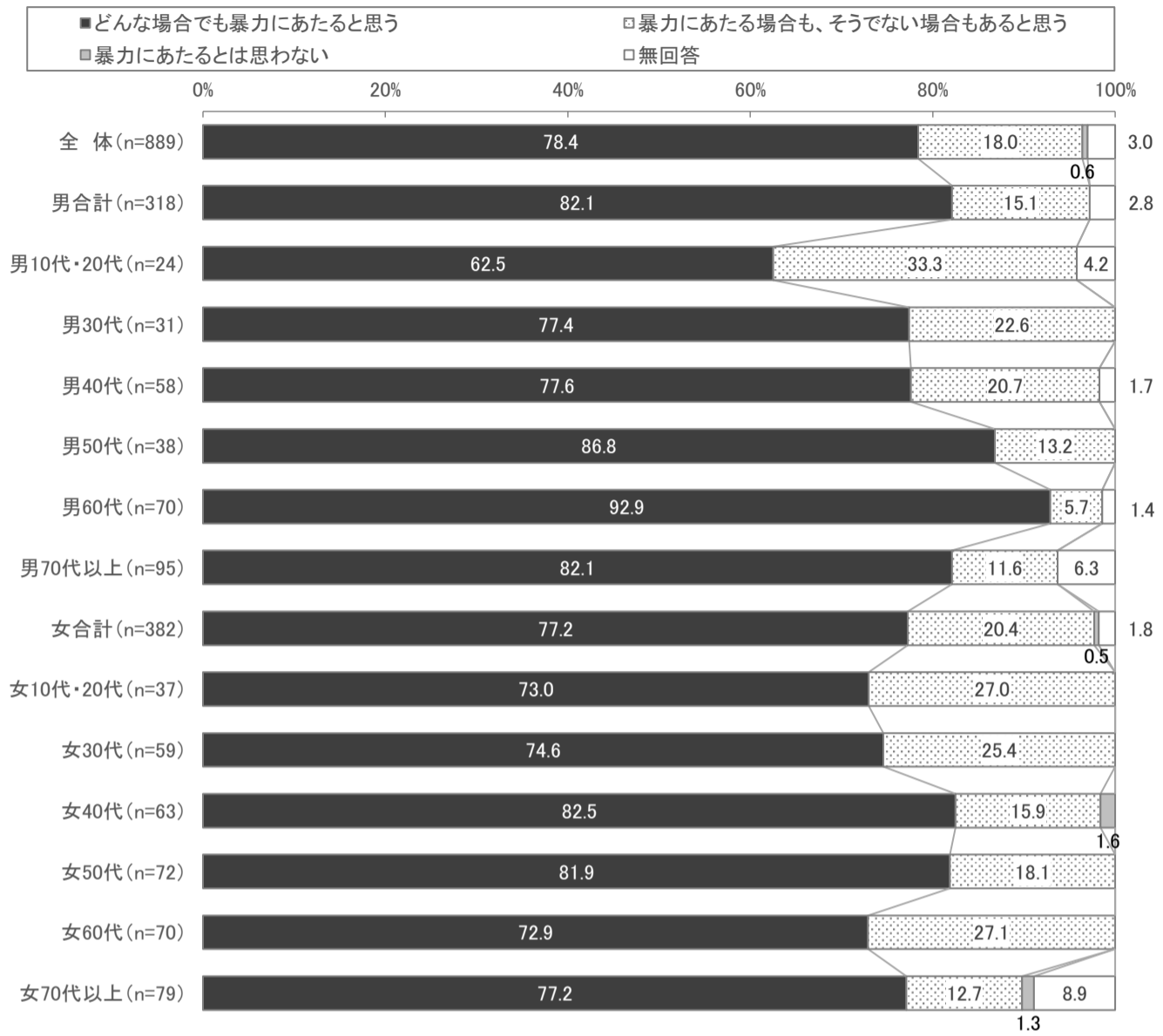


<考察>

高齢になればなるほどLGBTなど性的少数者の認知度が低いため、高齢者に対して啓発をしていく必要がある。

また、10～20代を見てみると、男性と女性で認知度に違いが見られる。これは性教育の機会の差があるからだろう。女性は月経という機会によって自分の性について考え、知る機会もあるが、男性では同等に考え、知識を得るような性教育の機会が少ない。LGBTなど性的少数者の問題も踏まえて、若年層での性に関する教育をしっかりと行っていくことが大切である。

問17 配偶者間での暴力意識(1)足でける



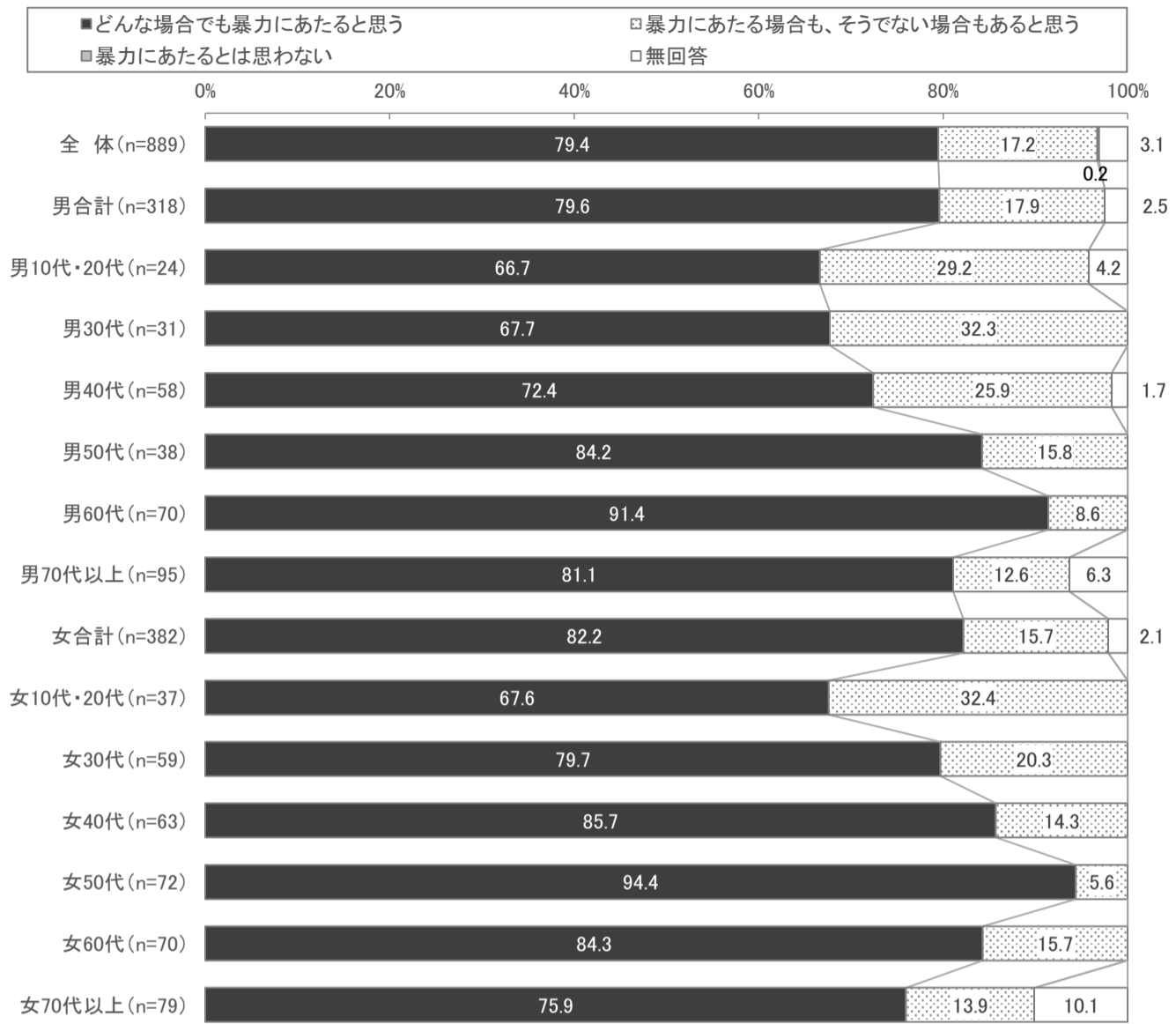
<考察>

問17「配偶者間での暴力意識」については、まとめて（P19～29）考察する。

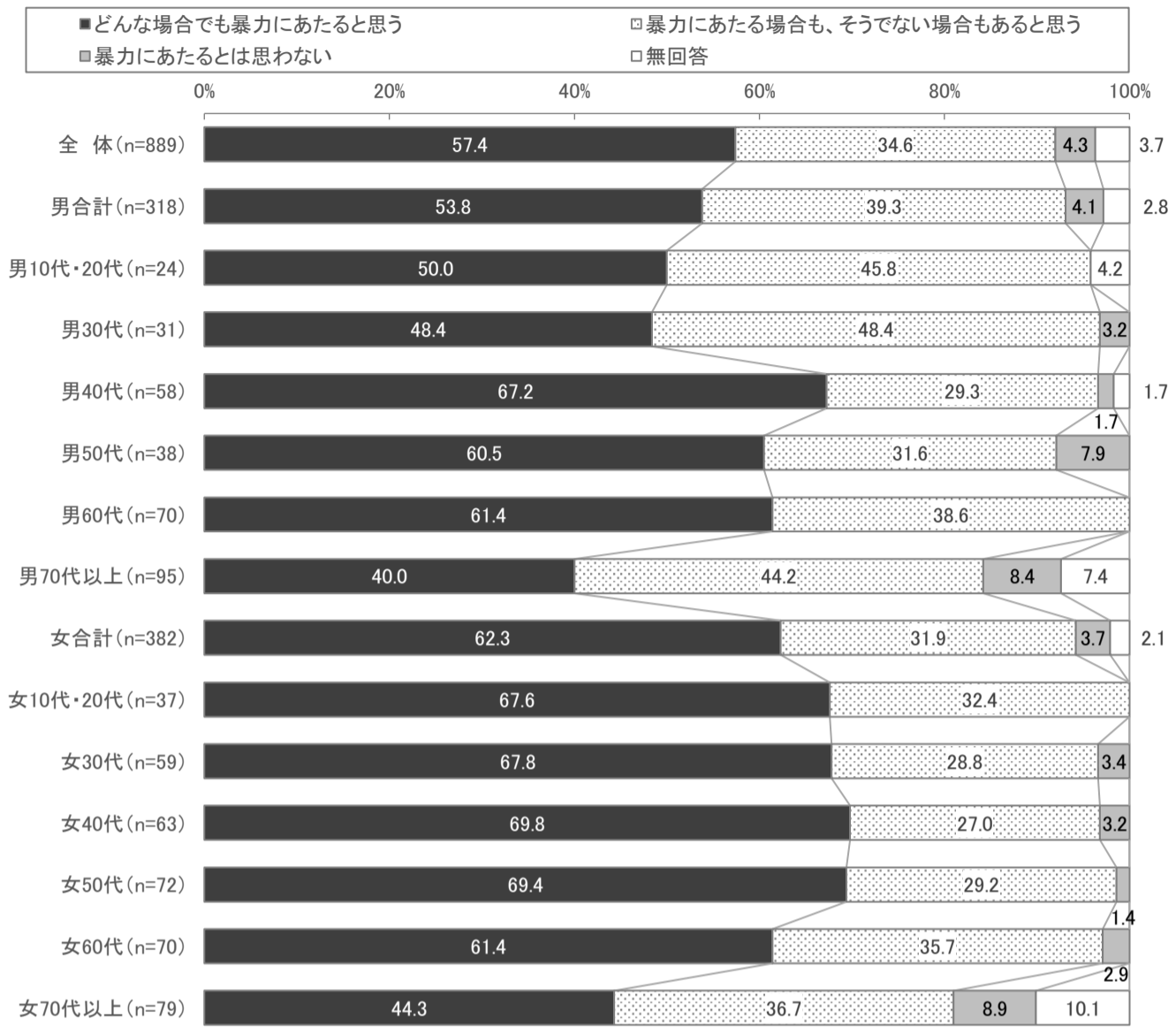
10代、20代の若年層と70代以上女性の高齢者層の認識が低い。また、男性のほうが女性よりも暴力に対する認識が低い。

その中でも「（7）交友関係や行先、電話・メールなどを細かく監視する」について、若年層の女性があまり暴力としていないというのは、男性に比べて認識なく行動している人が多いかもしれない。この結果からも、若年層を対象として、デートDV防止講座をはじめとした機会を通じ、正確な「暴力」の概念をしっかりと啓発していく必要がある。

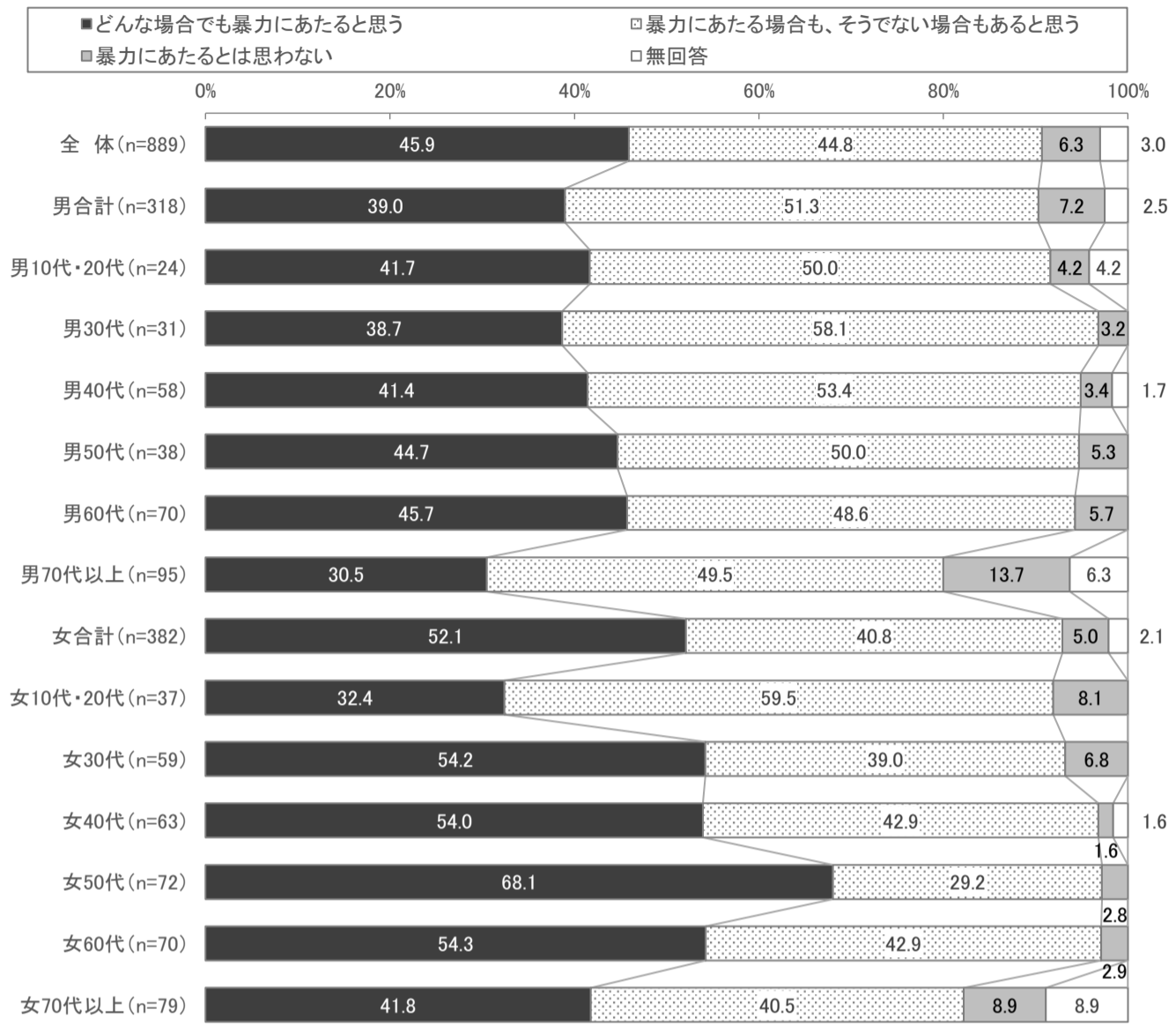
問17 配偶者間での暴力意識(2)平手で打つ



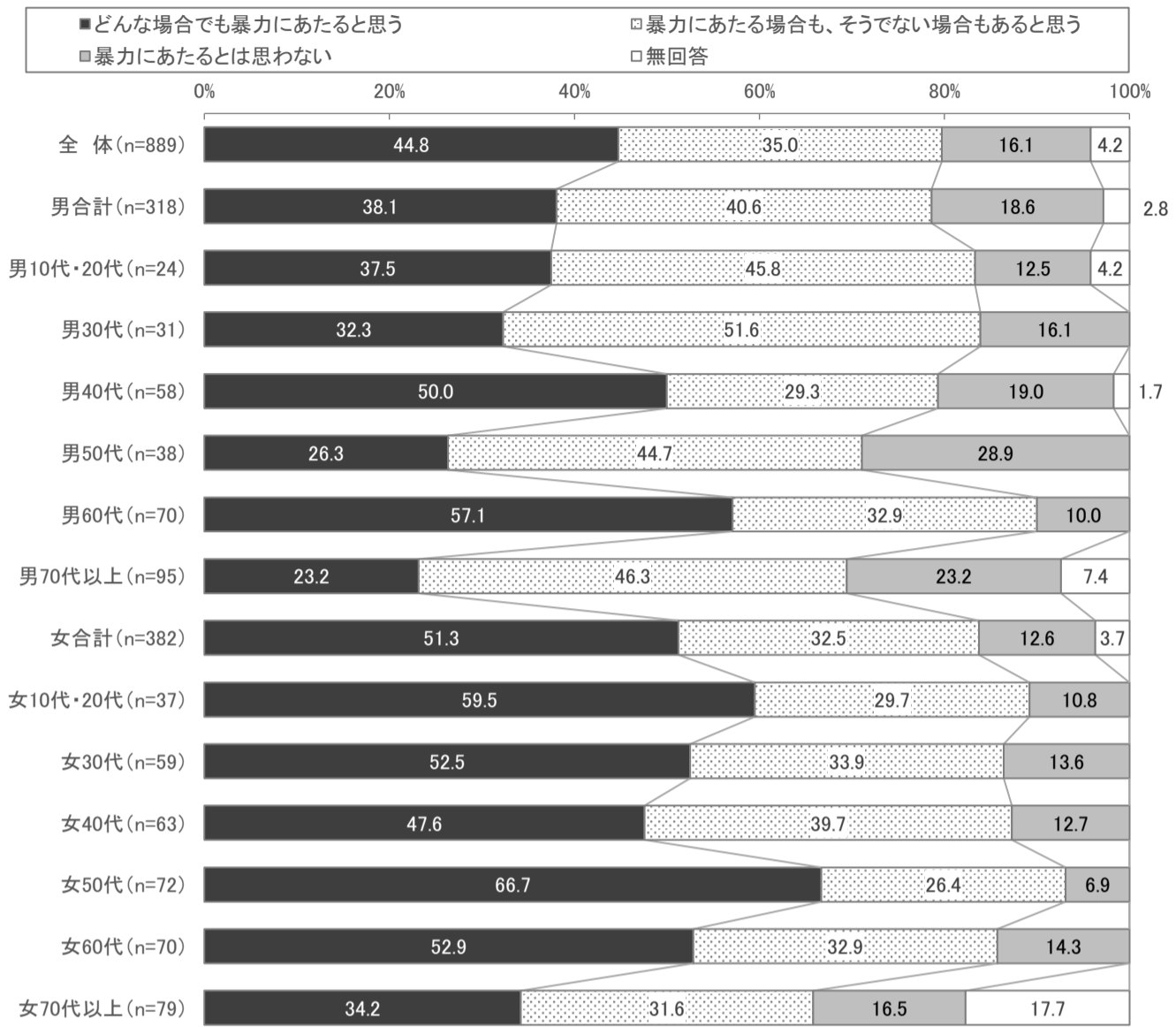
問17 配偶者間での暴力意識(3)なぐるふりをして、おどす



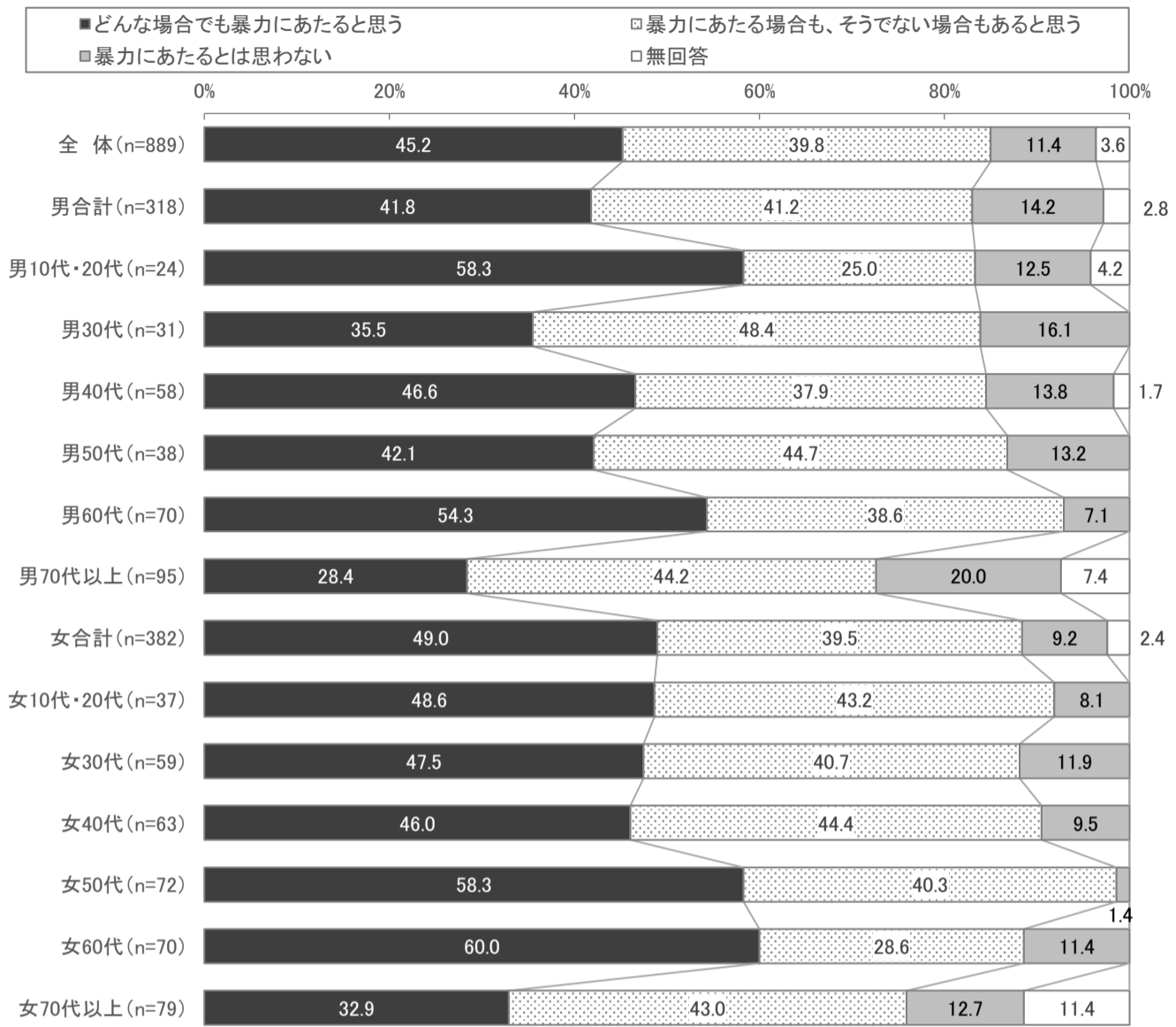
問17 配偶者間での暴力意識(4)大声でどなる



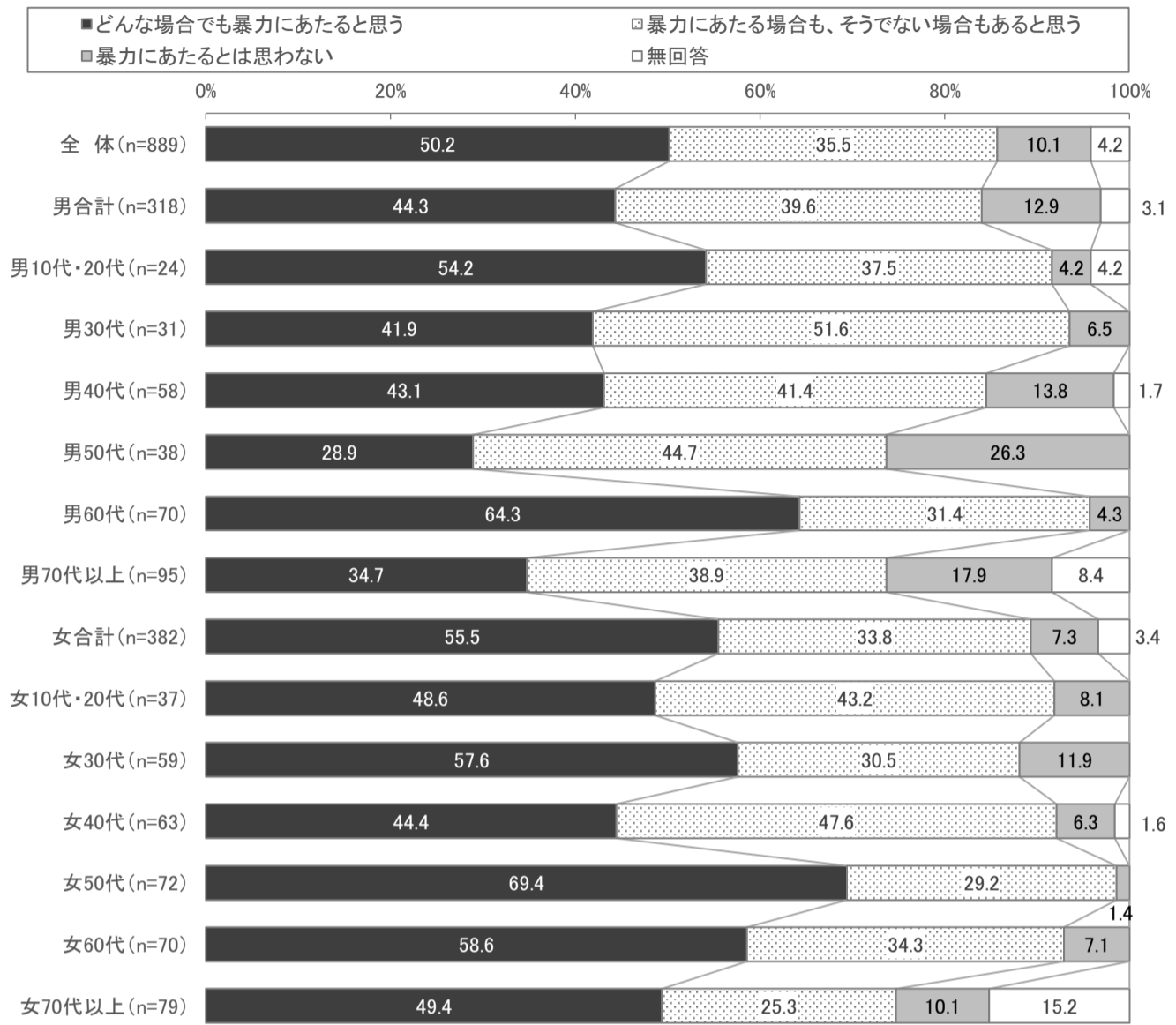
問17 配偶者間での暴力意識(5)他の異性との会話を許さない



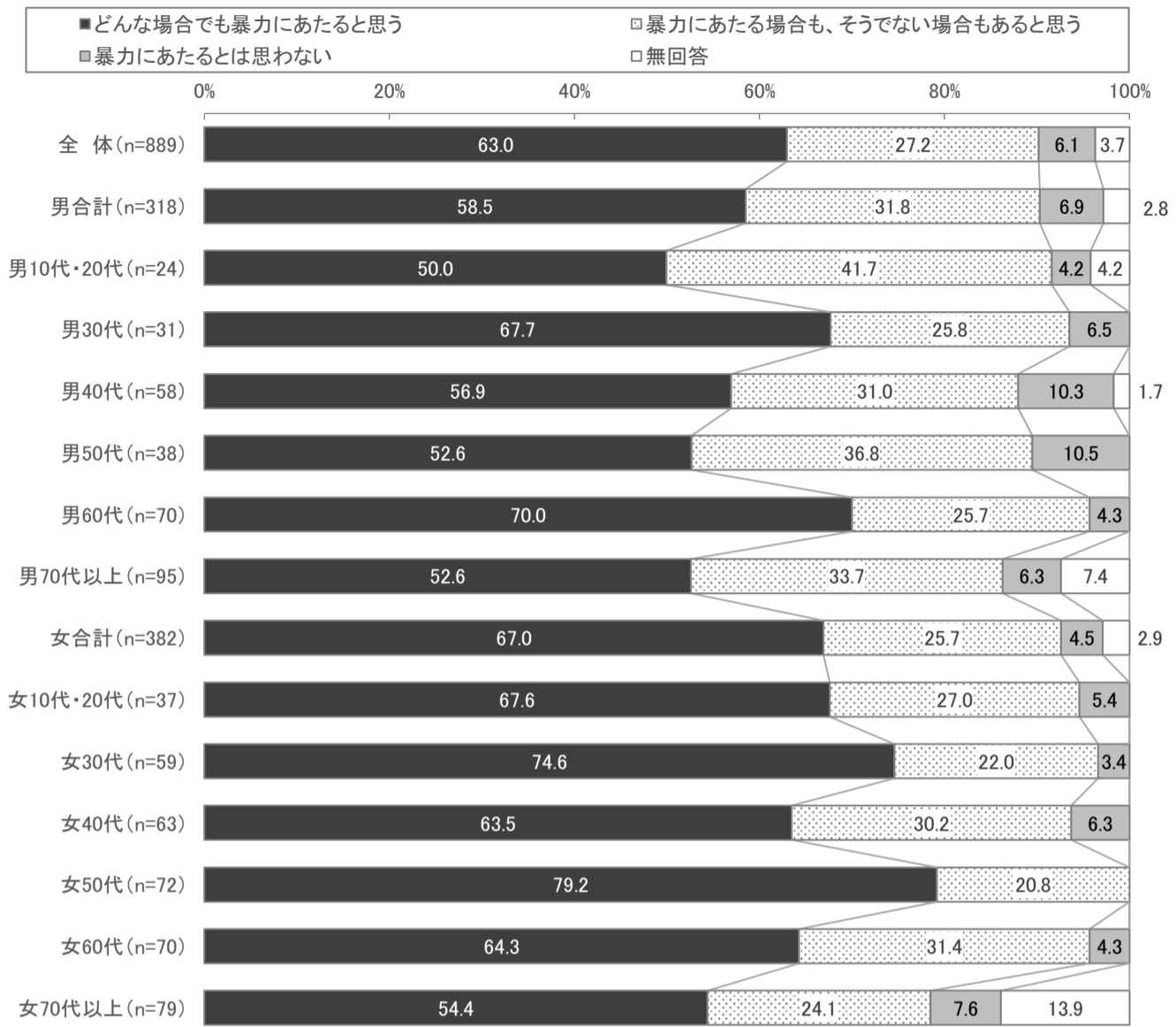
問17 配偶者間での暴力意識(6)何を言っても長時間無視し続ける



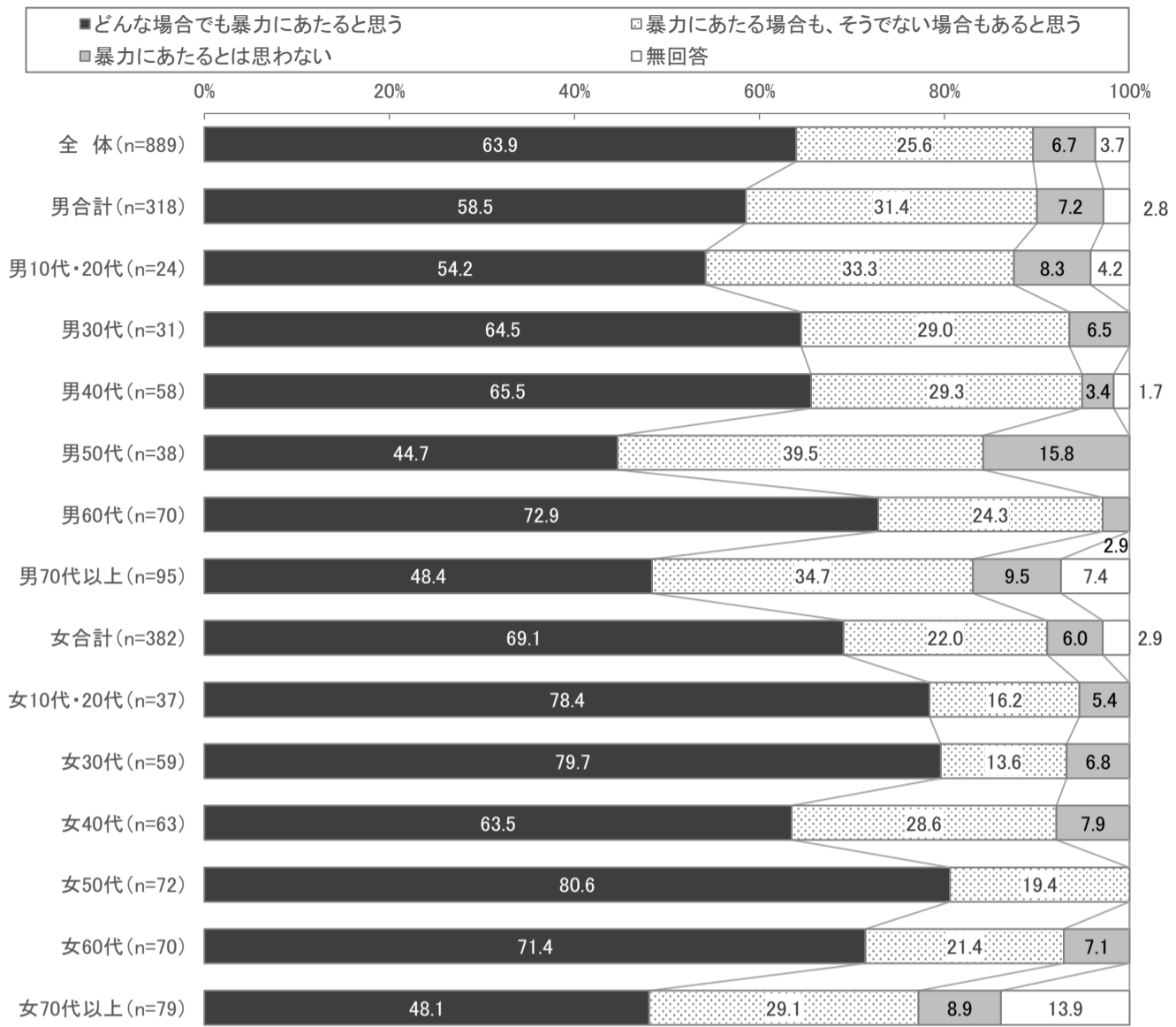
問17 配偶者間での暴力意識(7)交友関係や行き先、電話・メールなどを細かく監視する



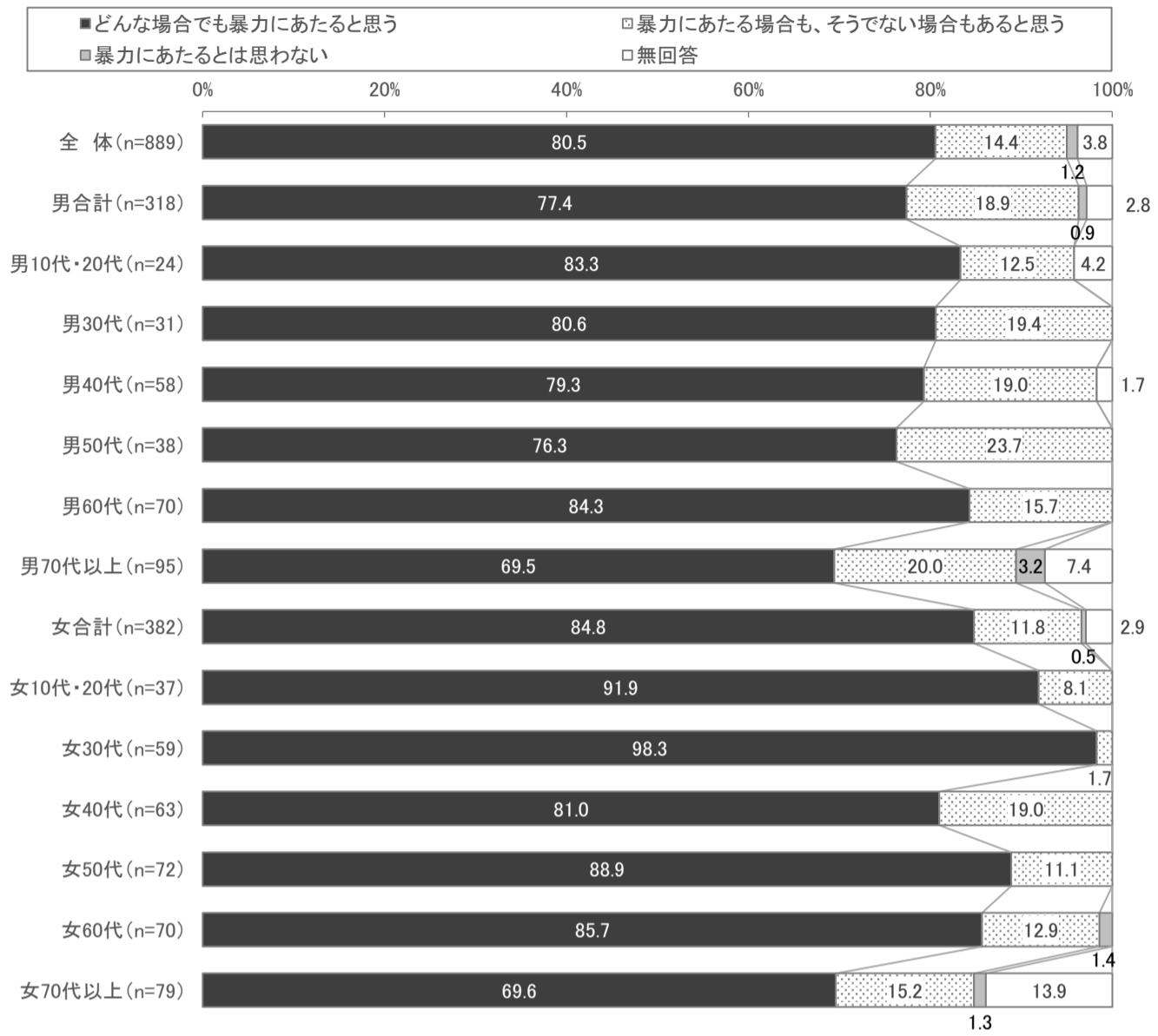
問17 配偶者間での暴力意識(8) 家計に必要な生活費を渡さない



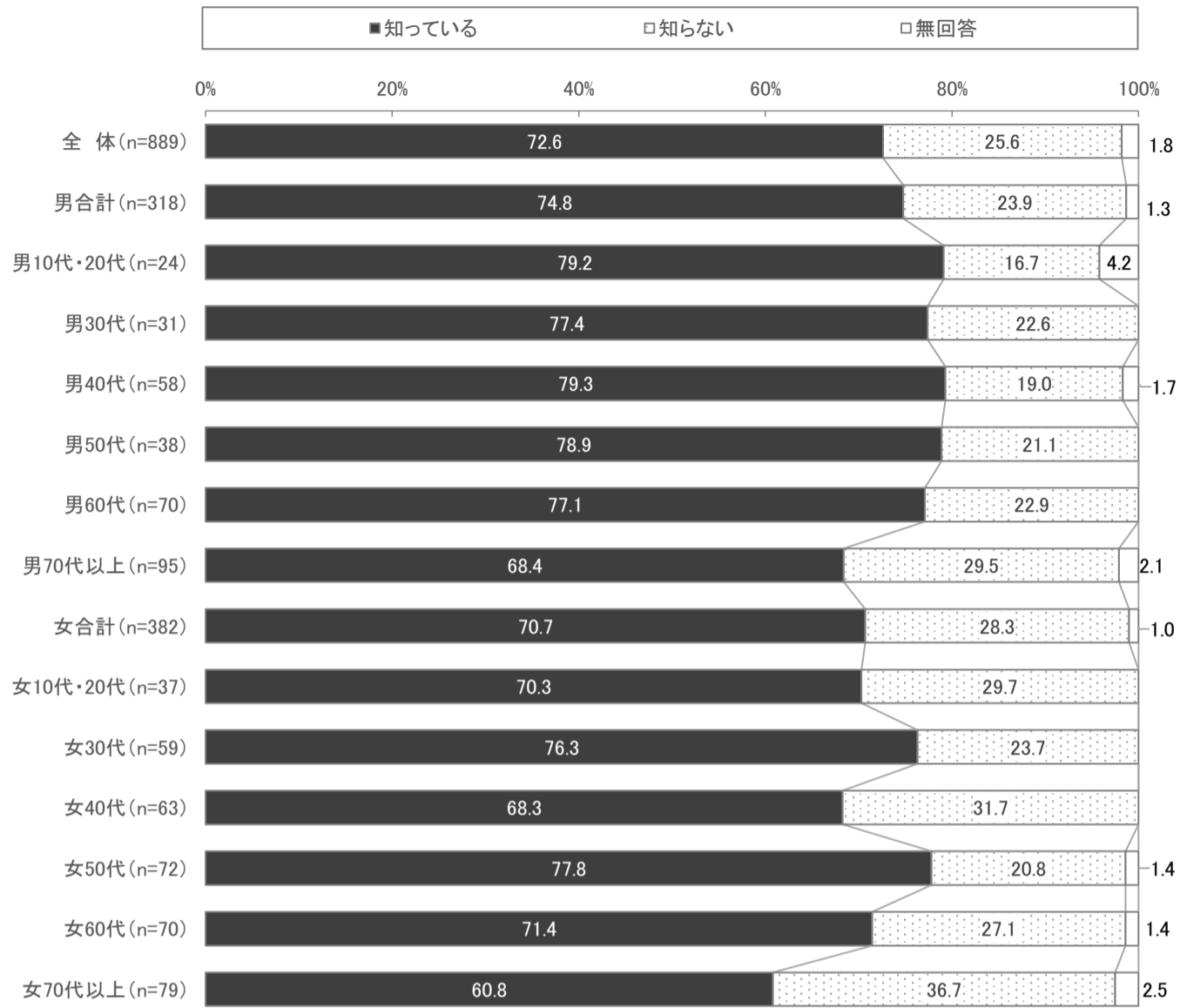
問17 配偶者間での暴力意識(9) 家族や友人との関わりを持たせない



問17 配偶者間での暴力意識(10)いやがっているのに、性的な行為を強要する



問20 若年層の女性が性的な被害を受ける問題の認知度



【まとめ】

年齢ごとに特徴がある。10・20代は経験や知識が足りず、イメージができてないところがある。30代は、過去に比べ、意識が変わってきている。40代は変革してきている現状に迷いがある。50代は様々な事柄の転換期である。

40～50代というのは、中間管理職の世代である。経営層と若年層の意識が変わっても、この層が変わらなければうまく変革していかない。こういった層にもワーク・ライフ・バランスについて考えてもらうためには、「介護」の問題を取り上げていくことが良いきっかけになるかもしれない。実際に男性50代で「介護」の問題を身近な問題としてとらえている人が多かった。「介護」については、地域差や性別間での認識のずれもあるが、少子化により誰もが直面する問題として、当事者意識をもつことが大切である。

また、40～50代というのは晩婚化の世代である。そのため、介護の問題が出てくるとダブルケアになる可能性が高い。では、なぜ、40～50代の子どもが結婚しないのか。理由として、その親世代が両立しているモデルにはなっていない可能性がある。家庭では新性別役割分業となり、女性が仕事も家庭もしっかりやらなければならない状況に追い込まれてしまう。

10年以内には介護というのは身近な問題になる人がさらに増える。いわゆる2025年問題である。今までは三世同居で仕事と家庭をわけて両立できていた家庭もあった。しかし、三世同居は、家父長制的な側面や人間関係の複雑さを生む点で決して最終的な解決策ではない。今後はそれらが回避できる妻方を中心とした近距離別居が良いかもしれない。ヨーロッパなどでも現役世代が両立できている多くは、親世代との近距離別居である。

加えて、晩婚化、未婚化は祖父母になる年齢も高齢化することを指す。やはり、高齢化してからでは、今までと同じように育児を祖父母が行っていくのは難しくなる。家事は質的な問題だけではなく、その担い手の数と分担に係る量的な問題でもある。男性も自分のことだと認識し、行動すべきである。行政としてもサポートしていく施策を打ち出していく必要がある。

さらに、長寿命化していく日本において、女性の貧困化の進行が問題である。結婚・出産を機に一旦仕事を辞め、子どもが大きくなったらまた働くという女性の「M字カーブ化」は、人生後半期へのマイナスの経済的影響という点で今後更に大きな問題となることだろう。

回避するためには女性が自分と向き合う時間が大切である。自分と向き合い、自分の世界を持つためにも就業というのは女性にとってとても大切な機会である。生涯未婚者や結婚後にシングルマザーになる人も増えてきている中、経済的なものは自分で何とかしなければならない。だからこそ、女性はずっと仕事を持ち続けるべきである、という意識の浸透をいかに図るかが重要な課題となる。

「配偶者間での暴力意識」に関しては、全体的に女性に比べて男性の暴力への認識の低さが大きな問題である。世代を問わず男性への啓発により注力すると同時に、今後は男性加害者の構成プログラムの実施等に向けた取組が一層重要となってくる。またとりわけ若年層に対しては、彼らを取り巻くSNSなどのネット情報環境の変化といった新しい動向に注意を払いながら、性別を問わず早期からのデートDV防止のための多様な取組を展開する必要がある。

本冊は報告書を一部抜粋して作成しております。
本調査の詳細については、以下よりご覧ください。

http://www.city.shizuoka.jp/003_000038.html

静岡市 男女共同参画 市民意識調査

検索

